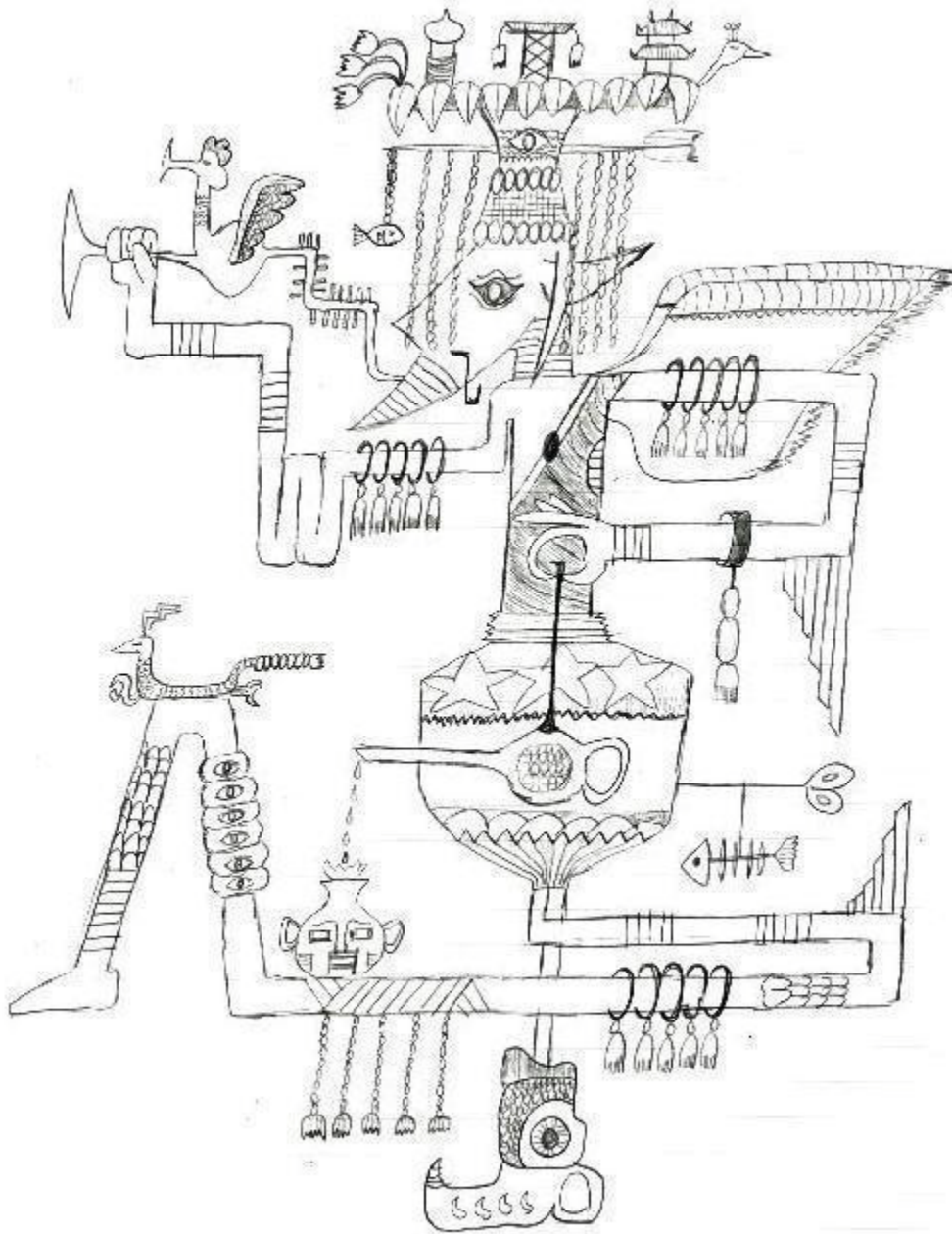


キマイラ

(『小説供養』改題)

岡田文弘



キマイラに関する三つの解釈

ヴェルサイユの卵剥き人（※長編「夢遊という散策」より抜粋）

料理人サウスの物語

新幹線ドリーマー

かたつむり日記

偽善の村

フィッシュボーン・スープ

せむし魚

渋谷散策日記

ヒア・カムズ・ザ・フラッド——箱舟をめぐる対話

ESCHATON

枯葉 *Epiloge*

キマイラに関する三つの解釈



第一の解釈

村の詩人は早起きだった。できれば、彼は一日中詩のことや若い娘達のことだけを考えて生きていたいと願っていたが、俗世に生きる人間として無理な話であった。

今朝も彼は朝食用の山羊の乳を調達するために、村外れにある小高い山へ登らなければならない。

詩人にとって労働は罪悪であった。自分が世に認められるような作品を書けずに悶々としているのは、早朝から乳を採りに行くような労働をして汗を流しているからだ、と信じていた。では止めればいい、と諸君は思うであろう。しかし、詩人は山羊の乳に浸したパンを食べることを何よりも好んでいたのだ。山羊の乳のない食卓など、彼にとっては悪夢そのものであった。そして詩人は貧乏であり、庭に自分専用の山羊を飼うことができなかった。やむなく彼は今日も手にバケツを提げて山を登り、野生の山羊の乳を搾りに行くのだった。

何の事はない。彼の詩人としての理想は、食欲によって打ち負かされているわけだ。

山の麓には、たくさんの蛇が生息している。詩人は、この細長くて奇妙な生き物から身を守るため、煙草のヤニを入れた袋を懷に忍ばせている。蛇は極端にヤニを嫌うのだ。

茂みを掻き分ける音がして、詩人の眼前に大蛇が飛び出してきた。しかし、飛びかかる寸前にヤニの臭いがその鼻を直撃し、大蛇は鎌首を背けて吐き捨てるように言った。

「臭い、臭い、またお前か」

「お早うさん」と、余裕の表情の詩人。

「また乳搾りか」と、うんざりした表情の大蛇。

「まあな」

「ご苦労なこった」大蛇はすると茂みに戻っていく。「この山羊狂いめ」

詩人は懷からヤニ入りの袋を取り出し、ぐるぐる振り回しながら歩く。彼が通った後には、何十匹もの蛇が木から落下してのた打ち回っている。「臭い」「臭い」「くそ野郎め」鼻を痙攣させながら、蛇たちが毒づく。平和な朝のひと時である。

麓の木立をぬけると、中腹の高原地帯に出る。ここには美しい山羊たちが生息している。

「お早う」詩人は手を振って叫ぶ。

「今朝も頼むよ」そう言って、詩人は手に持ったバケツを高く掲げてみせる。

「ちよっと待ってて。後でね」一等の雌山羊が、詩人に向かって言った。

見ると、山羊たちは首を高くもたげて、さかんに鳴きわめいている。詩人はバケツを椅子がわりにして座り込み、暫くその不協和音に満ち満ちた旋律に耳を傾けた。おぼろげながら拍子がわかってくると、これは山羊たちの合唱なのだということに気がついた。

「惜別の歌、か」詩人は呟いて、煙草を取り出した。

何度かこの光景には出くわしたことがある。これは、山羊たちによる「生贄の儀式」なのである。

この山の山頂には、たくさんのお獅子が生息している。何週間かに一度、年老いた山羊たちが獅子の元へ送られ、その空腹を満たすことになっている。若い山羊たちは、年老いた山羊たちを、歌を歌って送り出す。

それが、今詩人の眼前で展開されている哀しい音楽会なのだ。

朝露でぬれた煙草には、一向に灯が灯らない。詩人は柴煙を諦め、ぼんやりと山羊の群れを眺めた。あの、とぼとぼと山頂に向かって歩を進めている美しい山羊たち……数時間後には、肉片のこびりついた無数の骨と化す可憐な動物たち。詩人の胸に、ある種の感傷が湧いた。詩人は、その感傷をなるべく保存しておこうと努めた。他人に捧げる耽美な同情は、詩の糧になるからである。

朝の冷気を切り裂くような山羊の歌声は次第次第に小さくなり、それに比例するように山頂を目指す生贄たちの後姿も次第次第に小さくなっていった。終わった。詩人はシケモクを例のヤニ袋に捨て、立ち上がった。そして、バケツを手にした。

「仕方がないことよね」雌山羊が言った。

「ああ」詩人は、彼女の痩せた乳房を絞りながら曖昧な返事をした。

「私たちが生贄を捧げなくなれば、飢えた獅子どもは山を降りてくるわ。そうしたら、未曾有の大混乱よ」

「そうなるだろうな」詩人は乳臭い空気にむせ返りながら、この山の動物達の奇妙な共存関係に思いを馳せた。

「私もいつか、あの山頂に行くことに——」

「今は考えるな」詩人は彼女の言葉を遮って言った。「本当に、それが仕方がないことだと思っているならね」

雌山羊は目を伏せ、詩人は作業を続けた。しばらくの沈黙の後、雌山羊は詩人の方を見て言った。

「ねえ、近いうちにこの山は大噴火するの」

「そいつはいいね」と詩人。

「冗談じゃなくて、本当よ」雌山羊は静かな口調で言った。「ここら一帯が焼き尽くされ、灰まみれになるわ。逃げるなら今のうちよ」

「君らは逃げないのか」存外に平気な調子で詩人は言った。

「ええ。」

「獅子に家族を食われ、おまけに大噴火だぞ。なぜ、こんな山に住み続けるんだ」

「仕方がないことだから」と雌山羊は答えた。「それに、引越したところで、また新しい気苦労が増えるだけよ」

「とにかく、君らの乳はもう飲めなくなっちまうわけだ」絞り終えた手をハンケチで拭いながら、詩人が言った。

「ええ、そうね」と雌山羊。

「残念だな」

「そうでしょうね」

詩人は乳白色の液体で満たされたバケツを苦勞して運びながら、物思いに沈んでいた。大噴火による惨事のことは、あまり恐ろしく思わなかった。それは、詩人の想像力の許容を遙かに超えた予言だったからだ。今はただ、乳に浸したパンが食べられなくなることに、それだけが彼の心を揺さぶっていた。

いっそのこと、あの山のとっぺんから噴出す炎で、何もかもが焼き尽くされちまえばいいんだとすら思えた。

振り返って、山を眺めた。山頂に獅子、中腹に山羊、麓に蛇が住む、不思議な山。その不思議な均衡が今崩れようとしている。

一瞬、そのシルエットが揺らめいて、獅子の顔を持ち、腹から山羊の頭が突き出し、尻尾が蛇になっている奇妙な怪物の姿に変形した。怪物はその醜い口から火を噴き、哀しげに咆哮していた。

詩人は、山の名前であるキマイラをその怪物の名とした。この怪物について一篇の詩を書こう、彼はそう決意した。山羊の乳が食卓にない生活、その空恐ろしい生活が迫りつつある不安の中で、彼はその仕事に取り掛かるのだった。

第二の解釈

望遠鏡を覗き込んでいたジャックが船をこぎ始めた。あまりにも空気が暖かかったからに違いない。幸せな晴れた日の午後が、我々の睡魔を誘発している。

「こうも風が吹かないんじや、一ノツトも進めやしませんね」私の傍らで爪を磨きながら、リチャードが言った。「早いところ、港に停泊したいんですがね」

どこまでも青い空が広がっており、海には波一つ立っていない。潮の香りは絶えず鼻腔の奥に流れ込んでいるので、すでに私はその芳香を味わう能力を失っている。

そう、すでに私はその能力を失っている。私が船乗りになってから、一体どれほどの時間が流れてしまったのだろうか。

私はマストを見やる。青空を背景に聳え立つそれは、とても見栄えがする物体だ。ただ、今は何の役にも立っていない。

私は、頭上の帽子が少し右に傾いているのを感じ、水平に直した。そして、金ボタンの縫い付けられた制服の皺を伸ばす。船長としての威厳を絶やさぬように心がける。

船の生活は単調なものだ。楽しみと呼べるものがあるとすれば、それは日に一度の食事ぐらいなものである。

我々の食事の材料は船員である。昨日の晩飯は、この船で一番の力持ちであるドンだった。私は、ドンの肉は硬そうなイメージがあつたので気乗りがしなかったが、そのような贅沢は罰当たりというものである。何しろ彼は調理される前の晩に、香草をたっぷり浮かべた風呂に長時間入って自分の下拵えをしていたぐらいで、実に賞賛に値する男なのだ。

「お前は図体がでかいから、さぞ食ベであるだろうよ」

厨房に入る時、給仕長がドンにそう言った。ドンは肩をすくめた。

やがて、全員が入室し終えた食堂のテーブルに、所狭しと肉料理が並べられた。私の目をひいたものは、塩をまぶした指をカラリと揚げたもの (Fried Finger) とでも称すべき

もの）、足の裏入りの肉汁スープ（熊の掌以上の珍味だ）、文字通りの「目玉焼き」などなど。しかし何よりも魅力的だったのは、焼きたてのステーキである。

私は、熱い脂の汁が滴っているレアの肉片をフォークで突き刺し、目の前にかざした。

「どんな気分だ？」

私は、肉片に向かってそう尋ねた。

「さてね。不思議な気分ですよ、船長」と、ドンの欠片が答えた。「俺は自分をいっぱしのカニバリストだと思ってましたが、なにしろ喰われるのは初めてなもので……」

それにしても、死後の世界と言うのは、静かなもんですね。」

「ホット・プレートの上は、油が匆ねてパチパチうるさいんじゃないか？」

「いや、静かなもんですよ。」ドンは言った。「少しばかり薄暗くて、重さってもののない世界です」

「そうかい」

私はドンを口に含み、ゆっくり咀嚼した。上質な仔牛の肉の味がした。

私の口の中で、限りなく小さな繊維に分解しつつあるドンが呟いた。

「これから俺は船長の体の一部になるわけでしょう」

——まあ、そういうことだな。

「何とも言えない気分ですな」

——同感だ。

やがてドンは私の胃袋の中で、更に小さな小さな成分にほぐれてゆく。そして、私の中に溶け込んでゆく。

次はジャックの番ということになっている。ドンの肉が無くなれば、彼はミートパイや肉汁スープとなってテーブルの上に鎮座することとなる。

「今度は俺かあ」決定した時には、ジャックは決まり悪そうに頭を掻きながら言ったものだ。

「俺はガリガリだからなあ。（そう言っ、彼はシャツの袖をたくし上げた。鶏の足のような腕が露出した）今日から肥らなきやならん」

そんなわけで、彼は誰よりも多くドンの肉を食べるよう心がけていた。食事の後で、彼は苦しげに寝台に横たわり、近くの人に身振り手振りでこんなメッセージを伝えた。

今は俺に触るな話しかけるなよ、全部出ちまうからな！

今、まどろんでいる彼はどんな夢を見ていることだろうか。

「港町に着いたらまず船員募集の宣伝をしなけりやな」私は伸びをしながら言った。

「私がサンドイッチマンをやりまさ」とリチャード。「でかかど『求む、海の男！』と書いたカンバンをしょって、街を練り歩きますよ」

「よろしく頼む」

陽気なりチャードのことだ、カンバンの裏には大きく『求む、食材！』などと書いてほくそ笑んでいるかもしれない。

いつの間にか目覚めたジャックが歌っている。ジャックの歌声は、倦怠の陽だまりを潜り抜けて我々のところまで届いた。歌詞は聞き取れず（訛りのせいだろう）、旋律は私が今までに聴いたどんな音楽とも似つかないものだった。

「故郷の歌だそうです」リチャードが言った。

「まるで、山羊の鳴き声のような歌だ」私は笑って言った。それは、つまらぬ嫉妬が言わせたくだらな中傷だった。

記憶というものは、なんて残酷なのだろう！私は故郷がどこか忘れてしまった。流れ去った時間があまりにも強大すぎて、私の脳髄を押し潰してしまったのだ。

私は背伸びをして、遠くの風景を見やる。あの水平線の向こう、どのあたりに私の故郷はあるのだろうか？そして、地理的な故郷ではなく、概念的な故郷は何処にある？

私も、できることならばジャックのように故郷の歌が歌いたいのに。

いや、私だって、生を終える段になれば、自然と口をつくようにして歌を歌えるようになるのかもしれない。取り合えず今は、そう思っていたい。

早くリチャードに船長の職を譲り、晩飯の材料になってしまいたい。リチャードは優秀な私の弟子だ。きつといい船長になることだろう。

私は最近老いを感じる。自分の肉がどんどん固まっていくのを感じる。気付かないうちに、私の肌には着々と皺が刻まれていき、肉は硬直していく。

老人の肉は硬い。私の肉が柔らかいうちに、みんなに食べてもらいたいものだ。食卓に並んだ私の肉を食べた若者たちが「安物のスジ肉みたいだ」などという感想を述べるのはぞっとしない。

結局、私は自らの骨を船員たちの中に埋めることになる。私の体は、私を食べた船員たちの体の一部になって航海を続ける。

我々は生まれた時から死んでおり、そして死してなお生き続ける存在なのかもしれない。私にとっての概念的な故郷は、やはりこの船の上ということになるのだろうか。

この船にはライオンと山羊とヘビの像が彫ってある。これを彫ったのが、初代船長のキマイラなる人物であるという話を、私は先代の船長から聞いた。

私は時折、ライオンの頭と山羊の頭とヘビの頭を持つ怪物を想像して、その不気味ながらも滑稽ないでたちに思わず吹き出してしまうことがある。なんと無邪気で恐ろしく、ナセンスな偶像なのであろう。とは言え、この航海にうってつけの偶像であるということは、誰の目にもあきらかである。

この船はもう数千年、いやそれ以上も航海を続けているらしい。この船は時空を超えて航海し続けるのだ。行き先も無く、終わりも無く、海を永遠に漂い続けるのだ。新しい仲間を迎え入れ、古い仲間と決別し、食べる、食べられるを繰り返しつつ。

それにしても、不毛な航海であることだ。

私はその不毛さを思う時、いつか自分は一介の物書きであったことがあるのではないかという錯覚に捉われることがある。私は不毛さをひたすら記し続けた一人の物書きだったのではないか？不毛さをひたすら歌い続けた詩人だったのではないか？不毛さをひたすら

語り続ける小説家だったのではないか？

いや、今どこかでもう一人の私は、気だるい午後の空気を孕んだ書斎で紙くずの山に埋もれながら、不毛な航海日誌をせつせと書き綴っているのかもしれない。

ふいに、私の頬をなでていくものがあつた。

（私にとっては）香を失った潮風だった。

「おお、風が出て来やしたよ」リチャードが言った。

マストが風を飲み込んで翻っている。「おもかじいっばい！」という誰かのかけ声が聞こえる。

船はゆつくりと走り出す。

第三の解釈

さて、今現在、僕の部屋に部屋には一体のキマイラのミイラが置かれている。獅子の頭、山羊の頭、蛇の頭を有する、本来ならば畏怖すべき怪物なのであるが、哀しいことに僕が所有しているそれは畏怖の念を想起させるどころか、憐れみの念を呼び起こすような風貌である。

まず、ミイラになったことによって全身が縮んでおり、風が吹けばどこまでも飛ばされてゆきそうなほどに軽そうな外観である（事実軽いし、実際に隙間風に飛ばされてふわりふわりと室内を漂ったことすらある）。次に、問題の三つの頭であるが、獅子の頭は数年ほど毛の手入れを怠っている赤茶けた小猿のような有様、山羊の頭は夜勤明けの勤め人の悲哀を見事に表現しているが如き様相を呈し、蛇の頭にいたってはミミズの頭よりも貧弱である。ボルヘスの著書を紐解いてみれば、キマイラは大衆にすっかり飽きられてしまった退屈な妖怪であるというような記述が見られるが、なるほど飽きられるのも無理はないと思える情けなさである。

僕はこれを西荻窪の雑貨屋で購入した。なにぶんリーズナブルな値段であつたし、話の種に、いや、小説の種になると思つたので。目論見どおりこうして一編の小説が書かれたわけであるが、果たして書かれるほどの価値がある小説だったのかということとは甚だ疑問である。

僕はここらで筆を置こうと思う。御役御免になったキマイラのミイラは粗大ゴミにでも出すことになるのだろうか。いや、僕はそうはしないだろう。何故ならこの情けないキマイラは、見事に僕の生活に溶け込んでしまったのである。このキマイラが元々情けなかつたのか、それとも持ち主である僕に似て情けないのか、はたまた情けないもの同士の物悲しくも幸せな邂逅だったのか……。その答えは神のみぞ知る。

ヴェルサイユの卵剥き人

国境線の近く、荒野原が広がっている。山は遠く灰色に霞んで、時折吹く風は枯れかけの木を気紛れに揺さぶっている。そこに一軒の居酒屋が（置き忘れたかばんのように）ひっそりと在った。ルイ十五世はカツラを片手でくしゃくしゃと掻き回しながら、その灯を指して歩いていた。

居酒屋のカウンターには老人が一人座って、石版に図形だの数式だのを書きつけては思案している。彼はアルキメデスで、「私の冠に、純金以外の金属が混じっているかどうかを調べよ」と王に命じられて、大いに苦悩しているのである。老人の手に従って石版には美しい幾何学模様が現われ、そして消えた。

「ちよっと、じいさん」と彼に呼びかけるのは、肥った中国人のバーテンで、名は李白という。

「お前さん、そこへ座ってからもう二時間になるが、いい加減何か注文したらどうだ」

「酒を飲んでるどころじゃないんだ」アルキメデスは頭をごんごん叩きながら言った。

「飲まないなら表へ出ればいいのに」

「表で研究をしていたら、ローマ人兵士が侵攻してくるんでね。」

李白は肩をすくめ、アルキメデスのために用意したグラスにガボガボとウキスキーを注いで、自分で飲み干した。彼は客に酒を出すよりも自分で飲む方を好んだのである。

そこにチリンチリンと鈴の音がして、ドアが開いた。ルイ十五世が入って来た。

「へいらっしやい」李白はエプロンで口をぬぐいぬぐい、お辞儀をした。「なんにしましょ」

ルイ十五世はアルキメデスの横に座り、「ワインを」と言った。そして、大きく溜息をついた。

アルキメデスはちよっとの間石版から目を離して、ルイ十五世の方を見ていった。

「見慣れない顔だね。いっしょに飲むかい」

「飲んでないだろう、あんたは」李白が言った。「数字で酔っ払ってんだ」

「宮殿の庭園を散策していたら、急に頭が真っ白になり、気付いたらこの辺りを歩いていた。」そう言ってルイ十五世はカツラを外し、傍らに置いた。「まあいい。今日の職務は午前中に終わっているし、夜だってゴマを擦るしか能の無い貴族達といっしょに退屈な晩餐会だ。特に気にする予定も無い。此処が何処だか知らないが、時間は気にせずのんびりワインを楽しむことにしよう。」

「頭が真っ白になった、か」とアルキメデス。「空間の歪に落ちる時は、そんな気分になるものさ。」

「空間の歪・・・？」とルイ十五世。

「へえ。この居酒屋は、空間の歪にあるんです。」と李白。

「空間の歪などというものがあるのか？」

「へえ。空間も歪むことがあるんだそうで。うちの常連客のアインシュタインさんって方が、そうおっしゃってました。」

「彼はなかなか面白い男だよ」アルキメデスが言った。

「ところで」李白はコルクを抜くのに手間取りつつ、ルイ十五世に問うた。「さつき宮殿の

庭を散策なすってた、とおっしゃってましたが、ご職業は皇帝さんで？」

「いかにも。」

「ほう、そりゃあ結講！」李白はニカッと笑った。彼は以前皇帝に仕えた経験があった（酒癖のせいで首になったが）。李白は樽から酒を盗み飲みながら、ルイ十五世の気に入りそうな詩を立て続けに即興で詠み始めた。そして彼が一升を飲み終える頃には、詠まれた詩は百篇にもものぼった。ルイ十五世は李白が一篇の詩を詠むごとに金貨を与え、金貨がなくなると自分の身にまといつていた豪華な衣装を与えた。そのため、李白が一升飲み終える頃には、彼はすっかりみすばらしい身なりになってしまった。

「マスター、いい加減に静かにしろ！」アルキメデスが怒ったので李白はやっと朗詠を止め、ルイ十五世はひそかに安堵した。そこでルイ十五世はしゃんと背筋を伸ばして、李白に聞いた。「ゆで卵はできるかね？」

「へえ」きよとんとして、李白は答えた。「メニューにはございませんが、なんでしたらお作りしますよ。皇帝様の御要望に応えぬわけにもいきますまい」

「頼む」

しばらくして、李白がゆで卵を持ってくると、ルイ十五世は優雅な身振りでそれを受け取った。そして、これ以上無いほどに滑らかな手つきで殻を剥き、口に放り込んだ。この一連の動作は一分の隙も無く、まさに完成された芸術品と称しても過言ではないものであった。（何しろアルキメデスの目を石版から離させたほどである！）

「おったまげた」アルキメデスは感動を隠せない声で言った。「私は割合長い間生きてきたが、こんなに美しく卵を食べる人には始めて会ったよ！」

「おかわりをゆでて来ましょう！！」李白も興奮して、厨房にひっこんだ。

「朕の卵の食べっぷりは有名だね」とルイ十五世。「朕は宮廷での食事風景を下々の者たちに公開しているのだが、みな一様に朕が卵を食べる姿を見ると歓声をあげるね」

「そりゃさうだろう。料金を払ってでも見たいと思えるほど、見事なもんだよ」

「下々の者たちは、朕の威厳よりもむしろ卵の食べ方の方に敬意を表しているのかも知れぬな！」ルイ十五世は自虐的に笑って言った。「フランス史上、いや、世界史上最も偉大な指導者であるこのルイ十五世の一番の業績が、美しく卵を食べることだと見なされているとは！！」

ルイ十五世は大きくかぶりを振って、続けた。「いや、朕は最も偉大な指導者とは言えぬな。最も偉大な指導者は父上だ。そう、父上は偉大な方だった。フランスの権威を世界最高に高めたのだから。朕と言え、ゆで卵を剥いているだけだ。」

「親父さんは、陛下ほどにはうまく卵を食うことはできなかったでしょうよ。」李白がよくわからないお世辞を言い、店で一番大きな鍋をコンロの上に載せた。「さあ、今に卵をどっさり持つて参りますからな！！」

と、そこにドアが開いて、奇妙な帽子を頭に載せ、軍服に身を包んだ小男が入ってきた。

彼は目玉をギョロギョロさせて店内を一瞥し、カウンターの隅に座った。

「これはこれはナポレオンさん」李白がエプロンで手を拭いながら出てきた。「お久しぶりです。最近はこちらもお顔をお見せにならないもんだから、どうしたんだろうと思ってるんですよ」

「ちよっとエジプトの方へ遠出をしておってね」ナポレオンは胸を張って言った。「素晴ら

しい戦果を収めた。その上、面白い石も見つかってな。今調査中だが、学術的に価値のあるものかもしれないのだ。」

「その石とやらは、計算式を書くのには適しているのかい」石を見ると数式を書かずにおれないアルキメデスが質問した。

ナポレオンは笑って答えた。「生憎だが爺さん、その石はもうすでに文字でいっぱいなんだ。計算式の書けるスペースは無いよ」

「どんなことが書いてあるんで？」鍋から大量のゆで卵をすくい上げつつ、李白が問うた。「それがわからんでな」とナポレオンは肩をすくめる。「だが、いずれわかることだ。余の辞書に不可能という言葉は無い。」そして溜息をひとつついて、「では、ブランデーをもらおうか。」

なんという嫌味な奴だろう。ルイ十五世は今しがたやって来た男に、言いようの無い不快感を覚えた。どうやら朕と同じフランス人のようだ。だが、あのように醜く尊大な下司野郎が、最高の民族であるフランス人の一員であるとは到底信じがたい！！胸が悪くなる。ルイ十五世は苛々しながら、李白が運んできたゆで卵の山に手を伸ばした。(ルイ十五世の妙技は、彼の苛立ちの影響を受けることもなく、やはり優雅さそのものであった) ゆで卵の山はすぐに丘になり、そして更地になろうとしていた。(嗚呼、またアルキメデスが石版から目を離している！) 腹が膨れてきたせいか、少し落ち着きを取り戻したルイ十五世は、それにしても何故あの男にこれほどまで嫌悪感を抱いてしまうのだろうか、と考えてみることにした。答えは出なかった。ただ、漠然とした恐怖感とその根底にあるような気がして、思わずかぶりを振った。何を恐れている。神から王権を授かった朕が、何故あんなネズミ男を恐れねばならぬのだ！しかし、自分の卵剥きの見事さを見るにつけ、もしかして朕は権威の象徴ではなく国家の道化なのではないか・・・という思いが頭をもたげて来るのであった。

最終的にルイ十五世は何百個という卵を剥き、(さすがに彼一人では食べきれないので李白、アルキメデス、ナポレオンも手伝った) 床には殻が10センチ以上積もった。ナポレオンは卵で一杯になった腹を抱えて、さかんにげっぷを漏らしながら帰って行った。意外なことに、李白よりもアルキメデスの方が多く卵を食べた。「研究に没頭していたもので、ここ2ヶ月ぐらい飯を食う暇もなくてね。腹ぺこだったんだ」というのがその理由であった。

「いやあ、楽しかった」硫黄のような臭いを漂わせて、李白が言った。「それにしても、見事でした。」

「また今度来た時も頼むぜ」アルキメデスが驚異的な速さで数式を書き連ねつつ言った。ルイ十五世は優雅に右手を振り、笑顔で声援に答えた。しかしすぐさま暗い表情に戻って言った。

「最近、時々変な考えにとり憑かれるのだ。朕はずっと、自分が選ばれた人間であり、誰も成し得なかった奇跡を起こした人間であると信じていた。全能の神から王権を授けられた、神に愛された人間だと思っていた。しかし、朕はひょっとして、単に卵の殻剥きがうまいというだけの人間に過ぎず、朕の掌中にある強大な権力も、結局は上手な卵の割り方と同じ程度にしか賞賛され得られぬものなのかもしれない。」

「俗世に生きるってのは、そんなもんだよ。たったひとつでも褒められる得意があれ

ば、それでいいじゃないか」アルキメデスはそう言うと、石版を床にほうり捨てた。「駄目だ！煮詰まってきた。腹が一杯でものが考えられない。今日はもう帰って風呂にでも入るとするよ。お勘定」

「あんた何も飲んでやしないよ」と李白。「でも座席料金くらいは請求したいところだね」「卵代の一部を払うよ」アルキメデスは小銭をカウンターに投げて、席を立った。「それじゃ、お休み。」

「朕も帰るとするか」卵ではち切れそうになっている腹を抱え上げ、ルイ十五世が立ち上がった。「つけといてくれ」

立ち上がったルイ十五世は深呼吸をひとつし、しばらくの間黙想していた。そして彼はドアを開き、薄暗い荒野に出て行った。

後には李白と、大量の卵の殻が残された。今日はもう店じまいにするか。李白は店の奥から箒と袋を持ってきて（卵で膨れた腹をあちこちにぶつけながら）、片付けを開始した。これが、英雄の偉業というやつなんだろうな。割れた卵の殻をかき集めながら、李白は少し寂しい気分になった。山のような卵の殻。肝心の中身はどうの昔に食べられてしまった。後に残った卵の殻。純白であるそれもいつかは汚く変色し、そして塵と化して消えてしまう――。

李白は殻を箒でしゃくって、すっかり袋に移し終えてしまうと、その袋を引き摺って外に出た。外には宵の口の暗い空が広がっていた。李白は袋の口を開けると、二、三回勢いをつけて中身を空にぶちまけた。卵の殻の欠片は瞬く間に星に変わって、光を放ち始めた。

「おや！」李白は袋の中に、手付かずの卵を発見した。彼は嗚呼勿体ないとそれを食べかけたが、思い直して空に投げつけた。卵は月になって、一際明るい光で李白を照らした。

「頭を挙げて明月を眺め、頭を垂れて故郷を想う、か」と李白は呟いた。

先刻までの薄暗さが嘘であるかのように、降るような星空が広がっていた。その満天の星空の下を、ずぶ濡れで素っ裸のアルキメデスが「ユリイカ！！」と叫びながら駆け抜けていった。

料理人サウスの物語

その昔、一人の料理人がいた。名は、古文書に伝えられているところでは、サウスという。

料理人サウスは都で一番の料亭で二十年間修行をし、暖簾わけを許された。彼は町外れの通りに自分の店を構えた。サウスの開いた店は繁盛した。というのも、店の近くには役人の養成学校があり、その学生が昼時になると彼の店に飯を食いに来るようになったのである。来る日も来る日もサウスは学生を相手に飯を作り続けた。学生たちは小生意気で、彼が料理を作っている間中小難しい芸術談義を語り合ったり、試験の成績を誇り合ったりした。それは青くさく、片腹痛くなるような自慢話の応戦であった。しかしサウスはそんな話には耳を傾けず、ひたすら黙々と料理を作るのだった。そして学生たちも、出来上がった料理を食っている間はさすがに喋るのをやめ、静寂のひと時がおとずれるのだった。

後に、都では新しい皇帝が誕生した。皇帝はありとあらゆる娯楽を忌み嫌い、民から次々と楽しみを取り上げた。特に徹底されたのが、美食の禁止であった。生きるための営みである食事を樂しむなどもつての外である、というのが彼の理論であった。民たちは国家指定の国営食堂で三度の食事をとることが義務付けられ、料亭や居酒屋の類はどんなものであれ潰された。取り壊された店の跡地には、皇帝の巨大な銅像が建てられた。たちまちにして、都中が皇帝の銅像でいっぱいになった。

サウスが修行した料亭も例外ではなく、とうとう長きにわたる歴史に幕を下ろし閉店を余儀なくされた。規制の網は徐々に拡大し、周辺の町や村にある飲食施設もどんどん潰されていった。

とうとうある日、サウスの店にも役人がやって来た。そして、速やかに営業を中止し、ここから立ち退くように、と厳しい口調で言った。サウスは、うさくさそうに役人を見た。役人はどきりとした。同時に、彼の目を見て、学生時代のことを思い出してしまった。次の瞬間、彼は思わず椅子に座り、注文をしていた。「海老生姜を一人前！」

海老生姜というのは、海老の揚げ物と豚肉のしょうが焼きを盛り合わせた、サウスの店の名物料理であった。サウスはいつものように黙々と料理を作り、役人は夢中でそれを食べて、そのまま帰ってしまった。

それから何人もの役人がサウスの店に営業停止を命じに訪れたのだが、結果は同じことだった。みな、若い頃はサウスの飯で腹を膨らませていた連中ばかりだったのだ。彼らは自分の任務を忘れ、学生時代に戻ったかのような気分になって飯を食って帰ってしまうのだった。

中には、食べ物の誘惑に負けぬよう、あらかじめ食事をすませ満腹で店を訪れた役人も数多くいたが、サウスが豚肉を焼き始め、生姜のにおいがたちこめた途端、空腹になってしまふのだった。ならば、堂々と飯を食い、しかる後に営業停止を言い渡そう、と考える役人も何人もいたが、満腹になると心も広くなり、まあ今日のところは見逃してやるよと言って帰ってしまうのだった。

こうしてサウスの店は、いつまでもたっても潰される気配を見せなかった。そしてついには、国の中で唯一残った料理店となってしまった。

当然のことながら、偏狭な皇帝は怒り狂った。即刻サウスを処刑し、店を破壊して朕の銅像を建てよ。彼はそう命じて、とうとうサウスの店に軍隊を派遣した。総勢五万の軍隊がサウスの店を目指して行進し、人々の度肝を抜いた。

当のサウスは厨房でうつらうつらと昼寝をしていたのだが、表で物音がしたので目が覚めた。外を見てみると、武装した兵士たちが砂埃を立てて向かってくるのではないか。サウスはゆっくりと腰を上げ、鍋をコンロにかけた。

それから時が経ち、もうそろそろ日が暮れようとしていた。いつまでたっても軍隊が戻って来ないので、皇帝はやきもきしていた。様子を見に行った使者も、ちつとも帰って来ない。ついには業を煮やした皇帝は、馬に跨り、自らサウスの店に赴いた。

やがて町外れに到着した皇帝は、眼前に展開している光景を信じる事ができなかった。サウスの店を中心として放射線状に、見渡す限り一面、五万の兵士たちが雑魚寝をしていたのだ。兵士たちは、みな鎧を脱ぎ捨て、武器も捨て、眠りこけていたのである。彼らの傍らには、空っぽの皿と茶碗が山と積み上げられていた。兵士たちはたらふく飯を食ったようで、膨らんだ腹を出して幸せそうに居眠っていた。

——まさか、一人で五万人分の料理を？——

リアリストである皇帝は気が狂いそうな思いで兵士たちの山を掻き分け、掻き分け、掻き分け、ついにサウスの店にたどり着き、その中に突入した。

厨房にはサウスの姿はすでになかった。

皇帝は恐怖にも似た怒りで言葉を失った。しかし、その絶頂の怒りは、鼻の先を刺激する素敵な香りによって拡散してしまった。その香りは、テーブルの上に手付かずのままに残っていた、海老生姜の皿から漂っていた。

さて、古文書に残されている皇帝に関する記述はここまでである。この後、皇帝が自らの禁を破り、旨いものに舌鼓を打ったのかどうかはさだかではない。しかし、たぶん打ったであろうと筆者は考えている。

そして、サウスはどうなったのか？古文書によれば、彼はフライパンを背負って歩き続け、山を越え谷を越え海を越えて行き、どこまでもどこまでも歩き続け、その行方は誰も知らないが、確かなことは、今でもどこかの街で、海老を揚げ、豚肉を焼いているのだという。といったところで、筆者は筆を置こうと思う。ちょうど、注文した海老生姜が運ばれてきたので……。

それでは、いただきます。

学生ならば誰もが捜し求める『一時に大金を稼げるアルバイト』というものは、いくつかあるにはあるのですが、どれもそれなりのイワクがあったりするものです。

僕も知人に、「時給三千円のバイトあるんだけど、説明会に来ないかい？」などと誘われたことがあります。時給三千円？キツイ仕事なの？「いや、全然キツくないよ。座ってるだけでオーケーなんだとさ」

そんな美味しい話があるのか？——聞いてみるとどうやら『サクラ』の仕事らしいのです。職場はパチンコ屋です。午前九時から午後二時ごろまでの間——つまり、来店する客が少ない間——に、客のフリをしてひたすらパチスロをやる。たったこれだけのことで時給三千円なのだそうです。

実に美味しい仕事に思えますが、その美味しさにはやはり理由というものがあります。早い話がこのアルバイト、違法なのです。スケールが小さいとは言え、危険な仕事なのですから、給料も高くなるわけです。

しかし、よくよく考えてみれば、雇い主はそんな違法な仕事を斡旋するような無法者なのですから、お目当てのバイト代だってキッチンと支払われるかも怪しいものです。実のところ、ちっとも美味しくないですね。

サクラの他にも、曰くつきのアルバイトはいくつもあります。

ノーベル文学賞作家の大江健三郎も、初期にはそうした曰くつきアルバイトを題材にいくつか短編小説を書いています。例えば、タイトルがすべてを著す『奇妙な仕事』これは主人公が犬殺しのバイトを体験するという物語です。それから芥川賞候補にもなった『死者の奢り』これは主人公が大学病院にて死体運び——アルコール槽に漬けられている解剖用の死体を、新しい水槽に移し変える作業——のバイトをするという物語です。大学病院における死体運び、あるいは死体洗いのバイトというのは、都市伝説としても有名です（大江の作品が、その都市伝説が流布するきっかけになったという説もあります）。

それから、有名どころでは人体実験のアルバイトなんていうものもあります。製品化前の新薬が安全であるかどうか、バイトの学生を使って人体実験するわけです。なんでも、薬の危険さに比例してバイト代も高くなっていくと聞きます（ちなみに、このバイトを題材とした小説としては、筒井康隆のスラップ・スティック小説『エンガッツィオ司令塔』があります）。

さて、世の中にはそうした不思議なアルバイトが色々とあるわけですが、かくいう僕も学生時代にバイトがらみの奇妙な体験をしたことがあります。そのバイトは、サクラのように違法なわけでもないし、死体運びのように不気味なわけでもないし、人体実験のように危険なわけでもない、もっと地味な仕事だったのですが、しかしどことなく一風変わったものであったことだけは確かです。

そのバイトを紹介してくれたのは、当時僕が師事していた大学教授のM先生でした。(彼はもうすぐ定年を迎える、囲碁と日本酒と鴨蒸籠が大好きな好々爺です。)その先生曰く「僕の知人の学者が学生のバイトを探しているんだが、行ってみないか。バイト料ははずむそうぞ」とのこと。

別にかまわないですが、一体何をさせられるのですか？と問うてみれば、いや、詳しいことは僕もよく知らんのだがね、研究の手伝いか何かだろう、とのこと。

どこことなく怪しい香りもしないではなかったのですが、まあM先生が勧めるバイトならばそんなに変なものでもなからう——僕はそう考えたのです。前述したようにM先生は好々爺で、いっしょに蕎麦屋に行った時などは、食が細いくせにいつい鴨蒸籠の大盛りを注文して、案の定食べきれずに残った分を僕にくれたりもする、そんなとぼけた人物なのです。そんな先生の友人なのですから、悪人であるとは到底思えないのでした。

僕は、快く引き受けることにしました。M先生はさっそく瓶底眼鏡をかけ、節だらけの手に万年筆を握り、ご自慢の達筆でもって紹介状を書いてくれ、僕は翌週の日曜日にその雇い主であるF氏を訪ねることになりました。

承

F氏の家は、郊外の閑静な住宅街の一角にありました。僕は先生が手ずから書いてくれた地図(非常に難解でありました)を片手に、微妙な傾斜のついた道をてくてくと歩き、その家を目指しました。整然と立ち並ぶ街路樹からこぼれる太陽光線が、僕の首筋をゆつくりと焼いていました。たまに猛スピードで走ってゆく車が立てる音を除けば、非常に静かな街でした。俺も老後はこういう所でゆつくり過ごしたいものだ、僕は滝のように流れる汗を拭いながらそんなことを考えていました。

二、三回ほど道に迷いながらも、僕はなんとか無事に目的地へ到着することができました。それは、立ち並ぶ立派な家々の中でも一際大きな邸宅でした。荘厳な雰囲気を持つ塀が敷地をぐるりと取り囲み、庭には何本もの枝振りのよい松が植えられていました。正面には巨大な門が聳え立っていました。この家か、と僕はつぶやきました。

インターホンを押すと、シメられている最中のニワトリのような声が「鍵は開けてあるから入ってきなさい」と言いました。さいですか、それでは——僕はシャツの皺を伸ばし、掌で数回髪の毛を撫でつけ、ネクタイがいがないかを確認してから扉を開きました。

そして僕は夏草が生い茂っている前庭を通り抜けて、ようやくと玄関に到達しました。

なんとという巨漢なのだろう！

玄関で僕を出迎えてくれたF氏は、体重が二百キロ近くはあるように見受けられました。脚はまるで象のそののようにパンパンに腫れ上がっていました。彼の胴体はそのパンパンの脚すらもが細く見えてしまうほど膨れ上がっていました。そして彼の頭は、その巨大な胴体にすっかりめり込んでしまっているのです。あまりに堂々とした体躯なので、見ているこっちまで体が重くなったような気分になりました。それはそれは奇妙な気分でありました。

F氏は全身に限なくついた脂肪を盛大に揺らしながら、僕を応接間らしき部屋に案内してくれ

ました。応接間にたどり着くなりF氏はソファに身体を投げ出し、ポケットから錠剤を取り出して、小さな咳をいくつも漏らしながらそれを飲んでいました。おそらくは心臓の薬でしょう。やはりあれだけ重たい体を動かすのですから、少し歩いただけでもずいぶん体力を消耗してしまうでしょう。僕はF氏が回復するまで、しばらく待つことにしました。

部屋の床にはペルシャ風の絨毯がひかれ、天井からはシャンデリアが吊り下がっていました。調度品はどれも年代物のようで、埃をかぶっているものの、相当高級なものであることが見て取れました。しかし少々奇異だったのが、壁に何枚も貼られている古い写真でした。そこには、颯爽とサーフィンに興じている、精悍な若者の姿が映っていました。誰だろうかこの青年は、どことなくF氏の面影があるような気がする、と僕は写真とF氏を交互に見比べつつ考えていました。もしかすると、F氏の若い頃の写真だろうか……いやいや、とてもそうは思えない。なぜなら写真の中の若者はあまりにもスマートな体躯であるからだ。いくら人は変わるものだといっても、この青年がこんな老人になってしまおうとは俄かに考えがたい。しかしやはり、この青年にはF氏の面影があるなあ………ああ、ひよつとして、F氏の息子さんの写真かもな。うん、それなら納得がいく………。

……僕はそんなことを漠然と考えて、所在無い気分をごまかしていました。

待つこと数分後。ようやくとF氏も人心地がついたようなので、僕はごくごく簡単な挨拶と自己紹介をしながら、紹介状を差し出しました。F氏はそれを受け取ると、荒く鼻で「フー、フー、フー」と息をしながら、満足げな表情を浮かべて読み始めました。僕は彼が読み終わるのを待ちながら、あらためてF氏の全体像を確認してみ、眩暈にも似た感覚を覚えました。なんという巨漢なのだろう！フー、フー、フー。

「M先生はお元気かね」F氏は、紹介状に目を走らせながら僕にそう尋ねました。

「ええ、元気になさってます」と僕。

「（フー、フー、フー）。相変わらず、鴨蒸籠ばかり食べてるのかね、彼は？」とF氏。

「ええ、そうですね」と僕。

「そうか」とF氏。

「はい」と僕。

「鴨蒸籠は、（フー、フー、フー）、実に美味しいものな」とF氏。

「はい」と僕。

「温い汁に冷たい蕎麦という取り合わせは斬新だよねえ」とF氏。

「はい」と僕。

「ところで鴨蒸籠というものは、鴨南蛮の残り汁に盛り蕎麦をつけて食べてみたら意外とうまかった、ということから出来たメニューらしいな（フー、フー、フー）。」とF氏。

「へえ。そうなんですか。」と僕。

「知らなかっただろう？」とF氏。

「ええ。初耳でした」と僕。

得意げな笑顔のF氏。（笑うと顔の部品が頬肉の間に埋もれてしまうのでした）

愛想笑いの僕。

やがてF氏は読み終えた紹介状をばたばたと畳んで机の上に置くと、眼鏡をとり、顔を花柄のハンケチでひと拭いしました（たちまち、ハンケチは脂でべたべたになりました）。そして大きく呼吸をしながら、愛想笑いを浮かべて僕の方に向き直りました。

「ま、そう硬くならずに、楽にしてくれたまえ。（フー、フー、フー）。そうだ、お茶を出すのがまだだったな……。君、紅茶とコーヒーと、どちらが好きかね？」

「いえ、そんな、おかまいなく。」と、僕も愛想笑いを浮かべました。

「で、どちらかね？」とF氏。

「では、紅茶をいただきます」

F氏はうなずくと、二回手を打ち鳴らし、部屋の外に向かって「みほさん、ちょっと来なさい」と呼びかけました。

誰が入ってくるんだろう。娘さんか、孫娘さんか、それともお手伝いさんだろうか。

——しかし、一向にみほさんが部屋に入ってくる気配はありません。僕が不思議に思っている、F氏は誰もいない空間を手で指し示しながら「紹介しよう。（フー、フー、フー）。彼女が、高木みほさん。今は私の家で住み込みの家政婦をしてもらっている。」と言い、満足そうに微笑んでいるではありませんか。

僕は戸惑うばかりです。ちょっと待つてください、一体どこにその「みほさん」がいらっしやるんですか？僕にはそのお姿がぜんぜん見えないのですが——しかし、F氏はそんな僕の戸惑いなどお構いなしで、「お客さんに紅茶をお出ししておくれ」などと、やっぱり誰もいない空間に向かって話しかけています。

しばらくしてみほさんは部屋から退出し、お茶を淹れに行きました（？）。F氏はニヤニヤしながら「どうだ、なかなか可愛らしい娘だろう。（フー、フー、フー）。しかし見かけがいいばかりじゃなく、よく気のつく性根の優しい子なのだよ。」そう言つて、両肩の間に埋まってしまった頭を左右にゆつくりと動かしてみせました。

「はあ……。」僕は曖昧に相槌を打ちました。

「みほさんはああ見えてなかなか苦勞人でねえ。（フー、フー、フー）。若くしてご両親をなくしてしまつて、親戚をたらい回しにされてしまつたんだ。（フー、フー、フー）。それで、これではいかんということで、彼女の父親と面識のあつた私が引き取つたのさ。今は立派に大学にも行かせてやつている。（フー、フー、フー）。あとは、嫁の口が見つかれば、もう言うことなしなんだがね……。 （フー、フー、フー）。」と、F氏は滴り落ちる脂汗をハンケチで拭いながら、満足げな口調でとうとうと語るのです。

恐らくは、孤独な老人の妄想が生み出した幻影なのでしょう……。見たところF氏はこの広い屋敷に一人で暮らしているようです。毎日、彼の胸中には消しようのないさびしさが堆積し続けていたと思われます。そのさびしさが、『みほさん』の存在を彼の心の中で育み、そしていつしか彼は『みほさん』を実存するものとして認識するようになってしまったのでしょうか。実に物悲しくも恐ろしい話です。

……というようなことを考えて感慨に耽っている僕を見て、F氏は不思議そうに尋ねました。

「どうした？」

「いえ、何でもありません」僕は慌てて表情を切り替え、愛想笑いを顔面に貼り付けました。「とりあえず、Fさん、そろそろお仕事の内容についてお聞かせくださいませんか？」

「おお、そうだった。」言うなりF氏はひょいと腰を上げ、軽快な足取りで隣室へ消えて行きました。実に変な感じがしました。今さっき、ちよつと廊下を歩いただけでも死にそうになっていた彼が、今はなぜあんなに軽々とした身のこなしで動けるのでしょうか。F氏はすぐに戻ってきて、その手には何本かのビデオテープが握られていました。

「まず、ちよつと見てほしいものがある。」

そう言つて彼はテレビの電源を入れ、そのテープの中の一本をビデオデッキにセットし、再生しました。

『山陽新幹線（新大阪―博多）』というタイトルが映し出されて始まったそのビデオは、新幹線の運転席から見える風景が延々と流れるだけという、非常に奇妙な代物でありました。一体これは何なんだろう、と僕の頭上にクエスチョン・マークが浮き上がりました。

「これはシリーズにもなっているビデオだね、鉄つちやん連中が通販で買うんだよ。」とF氏。「鉄道ファンにとっては、運転席からどんな景色が見えているのかは興味深いことだし、またこのビデオを観ていればまるで自分自身が新幹線の運転手になったかのような空想に浸ることもできる。むろん、部屋に居ながらにして旅行気分を味わえるというのものもある。そんなわけで、なかなか楽しめる一品なのだよ。」

「なるほど。そういうものですか」と僕はなんとなく納得しつづなずきました。

「で、君には、こういうビデオを撮つて来てほしいんだよ。新幹線からの風景が延々と映っているビデオをね」F氏は巨大な腹を揺らしつつ身を乗り出して言いました。「交通費と撮影器具は私が支給する。むろん、『今見せたビデオと同じように運転席にカメラを仕掛けて録れ』などと言う無茶は言わない。私は特に、運転席からの眺望には興味はないからね。むしろ、客車の車窓からの景色に興味がある。だから君は新幹線に乗り、車窓から見える風景をカメラに収めて帰ってくる、それだけでいい」

「なるほど」いまいちピンとこないままに僕は何度もうなずいてみせました。F氏はそんな僕を見て、満足げな顔で大きくうなずいてみせました。

「ええと、いつまでに撮つてくればいいんですか？」

「いつなら出来そうだね？」

「そうですね、なにしろ暇なもので、その気になればいつでも出来ますが……」

「では、なるべく早めに取り掛かってくれ給え。」

「わかりました。で、あの……」

「バイト代か」と、F氏はにやにや笑い。

「はい。」

「フィルムの出来にもよるがね。ま、どんな出来であろうが最低でも……円ぐらいは払うつもりだよ（その金額は、かなり魅力的でありました）。しかし君のがんばり次第では、……円ぐらい出す気はある（その金額は、ほとんど僕にとって奇跡でした）。どうだね？」

「やります」僕は力強く言い切りました。

「そうか」F氏は相好を崩し、大きく深呼吸をしました。そして、眼鏡をはずして顔をハンケチでひと拭きしました（今、このハンケチにライターの炎を近づければたちまち燃え上がるような気がします）。フー、フー、フー。

というわけで、僕はめでたくF氏に採用されたわけです。F氏は参考資料として先ほど上映し

たのと同じような種類のビデオを数本および前任のバイトが撮影したフィルムを一本、それから新幹線の時刻表、地図、手持ち型ビデオカメラ、カメラの取説といったもろもろの備品を僕に渡して、またぞろ満足そうな顔をしました。

帰り際、F氏は書斎に貼つてある写真を指し示しながら「私の若い頃だよ（フー、フー、フー）」と、腹をもとい胸を張っていました。その時僕が無意識のうちによほど奇妙な顔つきをしていたのでしょうか、F氏は少々心外そうな顔をして「なんだい、疑い深そうな顔をして。そりや、今でこそ（フー、フー、フー）こんな有様だが、私にも君のように（フー、フー、フー）若い頃があったのだよ。」そしてふと、感慨深そうな表情で「人間というものはね、意外に簡単に肥えてしまうのだよ」と言いました。

人間というものはね、意外と簡単に肥えてしまうのだよ。

こうして面接は終わりました。

結局、みほさんは僕にお茶を出してくれませんでした。

転

その週末、僕はついに撮影を決行しました。

計画は以下です。東京―博多間を半日かけて走り、博多で一泊し、帰って来る。

——なんとも言えない、素っ気ない計画です。まあしかし、たった一泊とは言え、まがりなりにも九州までただで旅行できるわけであるし、相当に美味しい仕事であることは否めません。いや、本当にこのバイトは素晴らしい。素晴らしすぎて、少々恐いと言うか、薄気味悪いくらいです。F氏は一体何を考えているのでしょうか。全くもって不可解です。

一泊ですぐ帰って来る旅行と言えば、内田百閒の紀行小説『阿房列車』を思い出します。これは列車に乗ることだけを目的とした旅行の記録です。第一回の大阪行きの話では、「なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行つて来ようと思ふ」という書き出しの通り、特に用事も無いのに大阪に行き、到着したらやっぱり何も用事がないので帰ることにし、宿で一泊しただけで本当に帰って来てしまったというミもフタもない珍道中が描かれています。他のエピソードもだいたいそのような感じのものばかりで、とにかく百鬼園先生は列車での移動こそが旅の目的であり、観光や長逗留などしたくもないというスタンスなのです。（思想的に、F氏と近いものを感じます。）

僕は列車内で読む本として、その『阿房列車』の文庫を持って行こうと思ったのですが、部屋中探しても一向に出てきませんでした（本というものは、いざという時には見つからないものなのであります）。仕方がないので、別の紀行小説の本を持って行くことにしました。新進気鋭の作家が書いたヨーロッパ旅行記です。それは研究室の先輩から薦められた本であり、さつさと読んで彼に感想を報告する必要があったので、まあ丁度いいか。こうして僕のささやかな旅が始まったわけです。

僕は駅弁と駅蕎麦のどちらが好きかというと、断然駅蕎麦派であります。それで、今回も駅で蕎麦を食ってから旅立とうと思っていたのですが、どういうわけだか駅に到着した僕は、ふと気まぐれを起こし、蕎麦は食わずに駅弁を買ってしまったのです。別にどうということもない、ちまちまとしたオカズが行儀よく整列している、ごくごく普通の幕の内弁当です。蕎麦を食べるつもりだったのに、一体どうしちまったんだろう俺は、と、僕は幕の内弁当を片手に首をかしげました。しかしまあ、しょうがない。たまには駅弁もいいやもしれぬ。

というわけで僕は、幕の内弁当を片手に新幹線に乗り込んだわけです。

席に着くと、僕はまずカメラを取り出し、窓の方へレンズを向け、録画ボタンを押しました。

これで後は、テープが切れかけた時に補充をするだけ。実質的には仕事完了です。

ぼろい。

僕はけたたましい発車ベルの嘶きを聞きながら、一人ほくそ笑みました。

やがて新幹線はゆつくりと走り出し、徐々にスピードを上げて行きます。することのなくなつた僕は、カバンから本を取り出し、読み始めました。

ヨーロッパ旅行記。僕より何歳か年上の女性作家が書いたものです。著者近影を見てみると、少々顔が丸すぎるものの、目鼻立ちがはっきりしていて気のきつそうな、そこそこの美人です。その写真の下には、彼女の錚々たる経歴がズラリと並んでいます。まず、彼女は星条旗の国、ハンバーガーとフライドチキンの国であるアメリカで生まれHappyかつFreedomな幼少時代を送る。多感な思春期時代になるとヨーロッパを点々としながら数ヶ国語を習得、その過程において彼女は多種多様な文化の影響を受け、それが後の創作活動の大きな糧になっているとのこと。もう *blingual trilingual multilingual*、ぐらぐらで何でも御座れとのこと。そして大学卒業後には母国である日本に帰って来る（しかし『帰って来て』っておかしな表現ですね、経歴を読む限りでは彼女は日本を訪れたのがその時が始めてのようで、それまで行ったことのない場所に『帰って来る』というのはおかしい話）。そこで彼女は米国、欧州といった「素晴らしい国々」と比較して、このアジアの極東にある小国、日本があまりにも時代遅れで、文化程度の低い国であることにショックを受けます。そんな文化不毛地帯である日本の若者たちのために、数ヶ国語がペラペラに話せる上に本場アメリカじこみの自由思想を身に着けた私が啓蒙してあげましょう、という事で創作活動を始めたそうです。——要約するとだいたいこんな感じのことが書いてあります。そして彼女の発表する *Global* な視点と *flexible* な発想が横溢した珠玉の作品群は内外から高い評価を受けているとのこと。ほほう、なるほど。それでは僕のように日本の片隅でくすぶっていて、一度も海外に出たことがなく、何も将来に展望を見出せず、人として軸がぶれていて、挙句の果てに初対面の老人から「きみの顔は、三十歳過ぎても童貞のままでいるような男の顔だな」などと断言されてしまう類の人間は、ぜひとも彼女の足元にひれ伏し、その足の指の爪の垢を煎じて飲み、しっかりと啓蒙していただかなければなりません。

その本の内容は、彼女がヨーロッパを巡り、思い出の場所や人々を訪ねるというもの。パリ、ベルリン、ロンドン、チューリヒ、アムステルダム、僕にとっては地図やテレビジョンの旅番組でしか見たことのない魅惑的な場所が次から次へと登場します。そして彼女は地元の高級料理に舌鼓を打ち、青い目の素敵な人々と外国語で流暢に会話し、沈む夕日を眺めては日本に残してきたハンサムな恋人を思い出し *sentimental* な気分になるのです。

読んでいると、だんだん鬱っばい気分になってきます。彼女のように華々しい旅行をし、あまつさえその旅行の自慢話を一冊の本にまとめ、たくさんの人々に見せつけられるような恵まれた人がいる一方で、僕のこの体たらくときたら――。僕は本のページから目を離して、窓の外を見ました。雑然とビルが並んだ、汚い風景が延々と続いていました。嫌になる、と思いました。その上、こんな風景を大枚はたいて見たいとのたまう気狂いに雇われ、こうして旅をしているのだ、俺は。

ここら辺で行き止まりなのだろうか。

僕は本を閉じました。目も疲れてきたことですし、そもそも読書は娯楽のためにするはずで、それならば何ゆえ他人の自慢話に付き合わされるのが娯楽になるのか、それでは果たしてこれは読書と呼べる営みなのか、わからなくなったので。そして僕は座席にわが身を埋め、目を閉じました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

隣の席のサラリーマンが放った巨大なくしゃみによって、僕の意識は現実世界に戻ってきました。二時間ほど、眠っていたようです。

午後特有の倦怠が車内に充満していました。僕は胃袋に奇妙な空虚感を覚え、傍らに置いた幕の内がまだ手付かずであることを今更ながら思い出しました。とりあえず、弁当を食おう。僕はそれを手元に引き寄せ、厚紙の蓋を開きました。シンと冷え切ったおかずから、微かに醤油と魚においが立ち上りました。

僕は冷たいご飯粒を頬張りながら、ぼんやりと窓の外をながめていました。「ながむ」という古語には「眺める」と「物思いにふける」という二つの意味が内在されています。その時僕がしていた行為はまさに「ながむ」という言葉そのものでありました。カメラのレンズもまた、窓の外を「ながめ」ていました。窓の外は気持ちのよい晴れ空で、間違っても「長雨（ながめ）」などは降っていないのです。

その、雲一つない空の下には、田園地帯が広がっていました。田んぼの中には、僕のように窓の外をぼんやり眺めている新幹線乗客にアップールしているのでしょうか、大きな看板がいくつか立っていて、それらの看板にはのど飴の広告だの、防虫剤の宣伝だの、名も知らぬ不動産屋の電話番号などが描かれていました。そんな賑々しい板切れに時折目を奪われるうち、唐突に、僕の胸の中に奇妙な疑問が浮かび上がってきました。

これらの田んぼは、一体どんな人が耕しているのだろうか？

田んぼがあるということはもちろん、耕作する人がいる、これは当たり前のこと。では、それは如何なる人物なのか、彼（彼女）は、僕にとっては名も知らぬこの地域の一角で、一体どんな農業生活を送っているのだろう……？

やがて列車はトンネルに入りました。そのトンネルを抜けると、一秒と経たないうちにまた新たなトンネルに突入です。その、たった一秒間の空白のうちに、トンネルとトンネルの間に見えた風景、それは山間にある小さな集落でありました。

一瞬だけ集落が見えたな、と僕は、芥子のきいたインゲン豆を齧りながら独りごちました。さっき見た田んぼの耕作者が誰であるのかわからないように、僕はその集落がなんという名前なのか、そして一体どんな人々が住んでいるのか、やはりわからないのでありました。（とにかく、近代の科学力を結集して作られたこの列車は、あまりにも素早くすべてを素通りしてしまうのです）

——そう言えば、昔読んだ本の中で、次のような一節がありました。「あるトンネルとトンネルの間に、小さな村がある。新幹線から見るとは一瞬の村、しかしその村には三百年の歴史がある」——まさに今さっき僕が見た情景にぴったり文章です。しかしその文章が、何の本に書いてあったのか、残念ながら思い出せないのです。まあ、それは帰宅してから本棚をあさればわりと簡単にわかりそうなことですが、さっきから僕が目にしてきた田んぼや山間の集落について、そしてそこに暮らしている人たちについては、一体どれほどのことを僕は及び知ることができるのでしょう？

いや、今日目にした風景のみならず、今日に至るまで目にしながらも素通りしてきた、たくさん風景たち、——そして、その中で暮らす人たち——僕は彼らのことを何一つ知らないままなのです。それは一生知り得ないことなのかもしれない。そして一生、それら僕が素通りしてしまった風景の中で生きている人たちとは、出会わないのかもしれない。もちろん出会う可能性だけであるでしょうが、出会わない可能性もまた高いものであるような気がしました。またそれと同様に、彼らの方も一生僕という存在を知ることもなく、出会うこともなく過ぐすのかもしれない。しかしそれは、どうってことのないことで、至極当たり前のことなのです。ということは今更のように考えて、僕はというわけだか薄ら寒いような気分になってしまったのです。

トンネルを連続して潜り抜けた後、新幹線は市街地に差しかかりました。画一的な、立方体の形をした住宅が何千戸、何万戸とひしめき合っていて、まるで岸壁を覆い尽くすフジツボのようでした。遠くに見える山は、その中腹が切り拓かれて、それはまるでナイフでえぐられて出来た大きな傷口のような有様で、そこにもたくさんの家が乱立していました。そして、それらの家々に電力を供給するため、また、僕が乗っているこの新幹線を動かすため、仁王立ちになった巨人のような鉄塔が街の真ん中に一列縦隊で立ち並び、太い高压電線が張り巡らされていました。

この、新幹線の高架橋沿いに続く家々の一軒一軒に、そして、立ち並ぶアパートやマンションの部屋の一つ一つに様々な人たちが住んでいて、みな違った人生を背負い、出会ったり、出会わなかったりして生きているのだという、至極当たり前のことに今更のように気づいて、僕は愕然としました。僕は知らず知らずのうちに、自分の見えている範囲のみ、自分が遭遇している事物のみが『世界』なのだと漠然と思っていました。しかし、僕には見えていない範囲、僕が遭遇し

ていない事物にも、何千何百という物語と歴史がしかと存在し、そしてそれらこそがこの世界を形作る重要な構成要素であったのです。

思えば僕は、なんということもない平凡な風景や町並みを、こんなにつぶさに眺めたことは生まれて初めてでした。いつだつて、そんなものは何の感慨もなく素通りし、見過ごしていました。恥ずかしながら僕は小説家志望でした。だのに僕は、今まで一体何を見てきて、何を書こうとしていたのでしょうか。

窓の外へ向けられたカメラのレンズは、延々と続く世界の一端を、黙々と記録し続けていました。

僕もしばらくそのレンズにならつて、延々と続く世界の一端を凝視し続けました。

×××××

結局、ヨーロッパ旅行記はそれ以上読む気がおきませんでした。

結

「博多では、(フリー、フリー、フリー)、豚骨ラーメンでも食ったのかね？」

「ええ食べました。せっかくなので、何軒か回ってみました」

「若いうちは(フリー、フリー、フリー)いくらでも食えるからな。」

「いや、さすがに食いすぎちまったようで、ホテルに帰ってから腹をくだしましたが」

「ハッハッハ。ま、美味しいものを食う際には、(フリー、フリー、フリー)、それぐらいのリスクはおかす覚悟でいなけりやな。美食に明け暮れた古代ローマの貴族たちは、(フリー、フリー、フリー)、満腹して食べられなくなると、喉の奥に孔雀の羽根を突っ込んで胃袋の中のを吐き出したり、(フリー、フリー、フリー)、熱い料理をばくばくと食えるように、熱湯でうがいをして口腔内の粘膜を鍛えたと聞く。(フリー、フリー、フリー)、快楽と苦痛は表裏一体、そういうものだ。さて、(フリー、フリー、フリー)、無駄話はこれくらいにして」

と、F氏は身を乗り出し、テーブルの上に置かれた一本のビデオテープ——僕が撮影した、新幹線から見える風景の記録——を手に取りました。そして乗り出した身を再び元の位置に戻すことに四苦八苦しながら、「さっそく見させてもらうかな。(フリー、フリー、フリー)それで、君への報酬の額を決定することにする。(フリー、フリー、フリー)審査が終わるまで、隣室でちよつと待っててくれたまえ」

「わかりました」僕は腰を浮かせました。

しかしF氏はなぜかその直後、部屋を出て行くこうとする僕を呼び止めました。「ちよつと待ってくれ。(フリー、フリー、フリー)言い忘れていたことがあった」

「なんでしょう」と僕。

「みほさんのことなんだがね」F氏は少々下卑た微笑を浮かべつつ言いました。「なんでも、一目見るなりすっかり君のことを気に入ってしまったそうなんだよ。(フリー、フリー、フリー)で、是非君とダンスを踊りたいのだそうだ。彼女はダンスが大好きなのでね」そしてF氏は誰も居ない空間

を軽く叩くしぐさをしながら「こら、みほさん、恥ずかしがってないで、彼といっしょに踊っておいで！（フー、フー、フー）」

僕は戸惑うばかりです。僕はダンスなんて洒落た遊戯はやったことがない、いやそれ以前に、実体のない、僕には見えない、F氏の目にしか映っていない女性と、どうやって踊ればよいのでしょうか？僕は困惑したままで、みほさんの腰の位置と思われる何も無い空間に手を置きました。すると、どうしたことでしょう！生暖かいような、柔らかいような質感が、確かに僕の掌を捉えているではありませんか。僕は脊髄が凍り付いてゆくのを感じました。しかも、鼻先に、ミルクのような、花のような、甘く芳しい香りが立ち上ってきて、僕の脳髄を心地よく麻痺させてゆくのです。これはどうしたことなのでしょう？F氏の狂気が感染したのか、脳髄の回路を共有してしまったのか？しかし、柔らかな暖かい質感、甘ったるく乳臭い香りが、僕をどんどん阿呆にしてゆくようで、仕舞いに僕は戸惑うことすら億劫になって、くるくると回転し始めました。回転しながら、隣室に目をやると、テレビ画面を食い入るように見つめている肥満体の老人の姿が見えました。彼の頬を何か光る粒のようなものが流れていました。そして僕は空気を掻き抱き、頭の中で優雅な音楽を鳴らしながらターンし、ステップを踏み、くるくると回転し続けます。

こうして僕はみほさんを強く抱きしめながら、いつ終わるとも無いダンスをいつまでも踊り続けたのです。

かたつむり日記

昔むかし、二十とんで四人の仕立て屋さんたちがおりまして、みんなそろってカタツムリを殺しに行きました。ところがなんということでしょう、その中でいちばん強い男ですら、カタツムリのしっぽに触れることさえできずじまいでした。なにしろ、カタツムリの野郎が角を出したならば、その姿たるやまるで小さな猛牛のようなのですから！逃げろや逃げろ、仕立て屋さんたち、すぐに皆殺しにされちますよ！

1

その年はカタツムリが異常繁殖したおかげで、畑の野菜は台無しになった。あとには、無残に食い散らかされたキャベツのきれっぱしが風に舞っていた。そこで、わたしは野菜の代わりにカタツムリを食べて夏を乗り切ることにした。そう、実際のところ、わたしが所有しているものと言えば、件のカタツムリと、庭の隅に生えている椰子の木（この木は異常に背が高かったので、さすがのカタツムリたちも果実にありつく前に木登りを断念してしまったのだった）だけとなっていたのである。

カタツムリをつかまえてくる仕事は、近所に住む子どもに委託した。わたしの同居人であるオカリナは、通りで石蹴り遊びに興じている小汚い少年たちを集めて、一人ひとりに大きなボウルを渡しながらこう命令したものだ。「さあ、うちの庭でわがもの顔をしているでんでん虫たちを集めてきてちょうだい！ いっぱい集めてきてくれたら、冷たい椰子の実ジュースをご馳走するわよ！」

カタツムリ採りは少年たちにとってなかなか面白い遊戯だったらしく、彼らは半日ずっと狩猟に明け暮れた。程なくして、大量のカタツムリが捕獲された。

わたしは、そのカタツムリたちを大きなザルの中に収容し、脱走しないよう蓋をした。少年たちは裏庭で車座になって、泥だらけの顔に笑顔を浮かべ椰子の実ジュースを啜っている。さて――と、わたしは低く呟き。あとは気長に待つばかりだな。

強制収容所の中のカタツムリたちは、それから一週間断食を余儀なくさせられた。とにかく、腹の中のものぐすつかりなくなっちまうまで待たなければならぬのさ、とわたしはオカリナに説明した。連中、何を食ってたかわかったもんじやないからね。うん、とオカリナはうなずく。そして、「腹の中のものぐすつかりなくなっちま」った後、カタツムリたちはバケツに一杯の岩塩の中でその生涯を終えた。

『線路の向こう側』では、生涯を終えた後のカタツムリは一旦殻から追い出され、ニンニクを効かせたバターで炒められ、そしてまたぞろ殻の中に押し込められ、奇妙な窪みが並ぶ大層な容器に盛り付けられて食卓へ並べられる。しかし『線路のこっち側』で生まれ育ったわたしはその複雑怪奇な調理法の詳細を知らなかったので、昔祖母がやっていたように塩茹でにして食べることにした。ちょうどこんな風にカタツムリが大量発生した夏には、祖母は鍋一杯のカタツムリ

の塩茹でをこしらえたものだった。こうして、わたしとオカリナは日々カタツムリを茹でて食べ、椰子の実ジュースを飲んで暮らした。

2

時たま、わたしの家には隣人たちが遊びに来た。カタツムリが大好物のトランペットもその一人だ。彼はわたしとオカリナがカタツムリを茹で始めるなり、さっそくそのにおいを嗅ぎつけてやって来るのだった。そしてその日食卓に上るカタツムリの半分以上を一人でべろりと平らげてしまう、困った客人であった。

大量の椰子酒ですっかり出来上がったトランペットは、わたしとオカリナが作ったカタツムリ料理を絶賛し、『線路の向こう側』の市場で売ることをしきりにすすめた。これだけ美味しいカタツムリだもの『線路の向こう側』へ持って行けばとんでもない高値で売れるだろうよ！あんなたち、そろそろ子どもができるんだろ？（とトランペットは、オカリナの膨らみつつある腹を見ながら言った）子どもができたならなんやかんやで金がいるようになる。だから、今のうちにカタツムリを売りに行つて金を作つとくべきだよ。うん、なにしろ、庭にいくらでもいるカタツムリを売つてことは、元手ゼロだ、こんなぼろい商売はないよ！——しかし、わたしとオカリナは、トランペットがいくら力説しようとも、肩をすくめて笑っているだけであつた。ペットさんは、えらく『線路の向こう側』にご執心なようね！トランペットが上機嫌で帰宅した後、皿を洗いながらオカリナがそう言う。ああ、ペットさんはどれくらい『線路の向こう側』かぶれだからな。わたしはグラスを磨きながらそう答える。でもあんまり『線路の向こう側』の話ばかりしない方がいいだろうに。ここらは、『線路の向こう側』を快く思っていない人間がいっぱいいるんだからね。（事実、トランペットは近所の鼻つまみ者であつた）

『線路の向こう側』か、とわたしは呟く。その呟きは、収容所の中を所在なく這い回っているカタツムリの足音にかき消される。

3

去年の夏に心臓を痛めて以来仕事を休んでいる歌手のチューバ嬢は、膨張しきつた腹を揺らしながら、ぶどうの葉を手土産に持つてやつて来た。

ありがとう、でもなんでまたぶどうの葉をくれるの？とオカリナ。

これをカタツムリに食べさせたら、味がよくなるらしいのよ！とチューバ。オカリナちゃんが最近カタツムリばかり食べてるって聞いたもんだから、持つてきてあげたのよ。

心臓の調子はいかがです？とわたしはチューバに尋ねた。

まあ、いくぶんかマシにはなつたけど、そんなによくないわねえ、とチューバ。特に『こつち側』にはロクな医者がいやしないからねえ。でも『向こう側』に手術を受けに行くだけのお金も体力もないし。でもね、歌手をお休みして、親父がやつてる農園を手伝うようになってから、ちよつとは健康になつたみたいよ。やつぱり体を動かして労働するのはヘルシーなよね。今日持

つてきた葡萄の葉も、その農園から取ってきたやつだわよ！

その時、オカリナが椰子酒を樽から出すのに手こずっていることに気づいたわたしは、俺がやるからと言って台所に向かった。そうよ、オカリナちゃんは今身重なんだから無理しないでゆっくりしての方がいいわよ、とチューバ。わたしと入れ替わりに台所から出てきたオカリナは、最近本当にお腹が重たくて重たくて、と照れたように言いながら椅子に腰掛けた。

何ヶ月ぐらいになるの？とチューバ。五ヶ月よ、とオカリナ。

あたしも体型だけは妊婦さんみたいよね。チューバは威厳溢れる腹を揺らしながら笑う。

その後、チューバはわたしがつけてきた椰子酒に酔いしれ、気まぐれに歌を披露した。今日は特別に歌ってあげるわよ、とえらくもったいぶって歌い始めたわりには、ブランクを感じさせる、ひどい歌声であった。しやがれきった、調子はずれの歌が家の中に響き渡ると、わたしはやりきれない哀しさを覚えたもののだが、これはきつと酔っ払っているせいで無茶苦茶な音程になってしまうのだろう、と考えることにした。(実際のところ、昔のチューバは毎晩酒場で樽一杯の酒を飲みながらも見事な歌を歌っていたことを、わたしは覚えていたのだが)

4

翌日、わたしはさっそく強制収容所の中に葡萄の葉を入れてみた。空腹で人生に絶望しきっていたカタツムリたちは、突如として目の前に出現したご馳走に驚愕し、我先にと食らいついて行った。

その日の夕食、さっそく葡萄の葉入りカタツムリが食卓に供されることとなった。わたしもオカリナも相当に期待しつつフォークを手に取り、ボウルに山と盛られたカタツムリの山に手を伸ばした。しかし……なんと言うか、あまり目覚ましい味の違いがあるわけでもなく、いつも通りの味であった。なんだ、大したことないじゃないか。私とオカリナは目を見交わして肩をすくめ、そして黙々と食べ続けた。

しかし、やはり葡萄の葉は侮れないツールであった。我々があらかた食事を終えた頃になってやっと、その隠された真価が発揮されたのである。

最初に異変に気づいたのはオカリナだった。彼女は妙な表情を浮かべながら腹の周りを撫で回し、いつもよりも甲高い声で「なんだか変におながいっぱいになったわ」と言った。

「食べすぎかい？」とわたし。

「いいえ。もっと、変な感じがするの」

「つわり？」

「いいえ、違うわ」オカリナは首を振った。その途端、彼女の体がふわりと宙に浮き、そのままプカプカと天井まで上って行ってしまった。

わたしは仰天し、「一体どうしたんだ」と尋ねたが、オカリナは首を振るばかり。そうこうするうちに、今度はわたしが胃の中に違和感を覚え、たちまちプカプカと天井まで浮かび上がってしまった。

「どうやら我々は、葡萄の葉を食べたカタツムリを食べると、体内でヘリウムガスが発生する体質のようだな」私はプカプカと浮かびながら、甲高い声でそう言った。「ほら、心なしか僕らの声、

甲高いキンキン声になつてゐるだろ？これは、ヘリウムガスを吸った時特有の現象なのさ」

「そんな変な体質なんてあり得るの？」とオカリナ。

「ああ、ありえないことじゃないさ。」とわたし。「聞いた話では、ラテンアメリカには、ホット・チョコレートを飲むと体が浮かび上がる体質の神父さんがいるらしい。彼はその体質を生かして自分を見世物にして、見物人たちから教会建設のための寄付金を集めたんだとさ」

「ふうん」オカリナは気のない返事をした。

ちょうどその時、家の中にどやどやと一角獣の群れが入って来た。最近、夕方のこの時間になると、腹を空かせた一角獣たちがこの街に大挙して押し寄せて、時にはずうずうしくも家の中にまで侵入してくるのである。

しまった。今日に限って、勝手口の鍵を開けっ放しにしていたのである。一角獣たちはそろそろと列を成して入ってくる。いつもならすぐに追い払うところだが、今の我々は天井に浮かびっぱなしで身動きもとれない有様だ。わたしは懸命に下へ降りようとがきながら（空しい努力だった）一角獣たちに向かって大声で言った。「悪いけど、きみらが食べたがつてるようなものはいちにはないよ。食べ物といったら、カタツムリと腐りかけの椰子の実しかないんだからね！」

結局一角獣は小一時間ほど台所をかき回っていたが（空しい努力だった）、結局いい餌を発見することはできなかった。彼らは椰子の実際の果汁を少し舐めると、またぞろ隊列を組んでどこかへ去って行った。

「ねえ、どうしましょう」最後の一角獣が部屋から出て行くと、オカリナが苦笑いしながら言った。

「まだ病院は開いてたよな」わたしは空中を平泳ぎしながら言った。「ガスを抜いてもらいに行こう」

そのようなわけで我々は注意深く低空飛行しながら、町外れの病院に向かった。

病院の医者はやぶで有名だったが、ガス抜きの手際は鮮やかだった。彼はわたしとオカリナに奇妙なチューブ状の器具をくわえさせると、我々の体内に充滿しているヘリウムをあつと言う間に吸い取ってしまった。この治療だけは得意なのさ、と彼はまんざらでもなさげに語っていた。

村祭が近づいていた。

村祭は、村外れのあばら家に住むムラノカミを祭る行事である。ムラノカミは頭は猿、胴体は狸、手足は虎、尾は蛇のよく素性の知れない動物で、いつ頃からこの『線路のこっち側』で生きているのか、そして一体その正体が何であるのかは、謎に包まれている。かつてはヒョーヒョーという鳥のような不吉な鳴き声を発しつつ夜の街を徘徊し、天候を自在に操って雷鳴をとどろかせたり、時の権力者に取り憑いて呪い殺したりしていたのだそうだが、今では霊力が衰えてしまったのか、そうした恐ろしい呪術を使うことも少なくなり、ただあばら屋の中で細々と生きているばかりである。ところで聞いた話だが、『線路の向こう側』にも昔はマチノカミという同種の祟り神が住んでいたそうだが、もうその信仰が耐えて久しく、今ではその存在を記憶している者すら少ないのだとか。

村祭の前には、ムラノカミに供物を奉納しに行く決まりとなっている。今や、この決まりを律儀に遵守している住民もすっかり少なくなってしまった。わたしも人のことは言えない、去年までは真面目に奉納などしていなかった。しかし今年はなんと言ってもオカリナが身重であり、安産祈願のためにもきちんと供え物をしに行っておいた方がいいだろう。というわけで、私は大きな椰子の実を二つと、カゴ一杯のカタツムリを担いで村はずれのあばら家に向かったのである。

ムラノカミはあばら家の奥に設置された寝台の上に身を横たえていた。わたしが扉を開き、拍手を打つと、まず彼の尾である蛇がそれに反応して目を覚ました。蛇は鎌首をもたげて後頭部を突き、それで頭部の猿も目を覚ました。そしてムラノカミは寝台の上に起き上がり「なんだ。供物を持ってきたのか」と少ししやがれた声で言った。

わたしが頷くと、ムラノカミは「その上に置いてくれ」と言い、寝台の横に設置された巨大な杯を指差した（その指先には、虎の鋭い爪が生えていた）。杯の上にはすでに西瓜だの葡萄だの、他の住民が持ってきたと思われる供物も積まれていた。

寝台の下には、足を怪我した一角獣が何頭も横たわっていた。「不憫なものよ」と言いながらムラノカミはそのうちの一头をつまみ上げ、頭から食べ始めた。

「最近、相当な数の一角獣がこの村に流入して来ているだろう」

ムラノカミが言うことには、『線路の向こう側』の連中が一年前この付近の山を住宅建設のために乱開発したせいで、そこにずっと住んでいた大勢の一角獣たちが餌場を失ってしまい、仕方がないので一角獣たちは里へ降りて来て、餌を求めてそこら中をうろつくようになってしまったのだと言う。

「山を切りひらいちまったおかげで、とうとうヤマノカミもいなくなってしまった。マチノカミを追放した時とおんなじだ。蹂躪し、蔑み、そして知らんぷりする。それが奴等のやり口さ。」注意深く骨を噛み砕きながら、ムラノカミは言う。「おまけに奴等の目には、この一角獣たちが見えないときた。何にも見えてやしないんだ、あいつらと来たら何にも見えてやしないんだからな」

ムラノカミが一头の一角獣を食べ終える頃、残った一角獣たちは互いに共食いを始めていた。

「この有様だ！」ムラノカミはうんざりした声で言う。そして、奇妙な甲高い声でヒョーヒョーと鳴いた。

6

そして、村祭の日がやって来た。朝から空一面を重たげな雲が覆い尽くしていて、雷鳴が轟いていた。ムラノカミが老体を鞭打って空を飛び回り、久々に力を発揮しているらしかった。ヒョーヒョーという不吉な鳴き声が響き渡り、空に亀裂が入ったかのような稲光が瞬く。お祭りだ、とわたしは呟いた。

祭と言っても、さして派手なものではない。昔はもっと盛大にやったらしいが、今では夕方頃から食べ物を持ち寄って晚餐会を開き、その後酒を飲みながらちよつとしたダンスパーティーを行う、というごくごくシンプルなものになっている。わたしは朝から鍋一杯のカタツムリを茹で、それを持ってオカリナといっしょにチューバ嬢の家へ向かった。今年の晚餐会は、チューバ嬢の

家で行うことになっていたのである。

祭に参加する人は年々減ってきている。今年は十六人だった。おそらく、わたしとオカリナの子どもが大人になる前に、この催し物の伝統は絶えてしまうだろう。そうすれば、ムラノカミはどこかへ行ってしまいうだろう。マチノカミやヤマノカミがいつの間にか追放されてしまったように。

チューバは昔ステージで着ていたお気に入りの衣装……カラフルなひだと宝石（のように綺麗なガラス細工）で飾り付けられた、形容しがたい趣味のドレス……を着て、アイシャドーと口紅と白粉を塗りたくり、つけまつげと巨大なカツラを装着していた。相当に気合を入れているな、とわたしとオカリナは顔を見合わせて苦笑いした。それはそれは相当な気合であった。なしる昔の衣装を着るには今の彼女の腹は度を越して立派すぎるので、彼女はコルセットでもって自らの体を締め上げているのだった（晩餐会が終るまでに窒息死しかねない有様で、若干不安だった）。そして顔に目立つ小皺の間に白粉が入り込み、アイシャドーと口紅の大量使用は道化師のメーキャップを思わせた。カツラに関しては最早何も語れない。わたしのボキヤブラリーではとうてい太刀打ちできないカツラである。なんでも、虎の髭を使用したインド産のカツラなのか。

またたくまに、テーブルの上はみんなが持ち寄った料理でいっぱいになった。そして、特に乾杯の音頭などとられることもないままに食事が始まった。こと、全員の注目を集めたのは、水車小屋に住むオカマのハモニカが持ってきたセロリだった。スティック状に切った生のセロリをマヨネーズにつけて食べるという、これ以上にはいほどシンプルな一品だったが、本当に美味しかった。

「なんか今年は作物の出来が悪かったのよオ。他の野菜はサッパリできなかったんだけどオ、セロリだけはできたのよねエ」ハモニカは彼特有のオカマ声でそう説明した。「もう、セロリばかり出来てさア。どうしてかしらねエ。トマトやなんか、萎れて縮んでまるで梅干みみたいな有様だったのにイ。」

「こんなうまいセロリが出来ただけマシさ」と私。「うちの畑なんか、カタツムリのおかげで野菜類は全滅だからな」

「で、これが件のカタツムリってわけね」とチューバ嬢がわたしたちの持参したエスカルゴ料理を摘み上げながら言い、一同は笑った。

晩餐会で最も強く心に残ったというか、わたしとオカリナの心に深く影を投げかけたのは、『線路の向こう側』かぶれのトランペットの言葉だった。

彼はオカリナにこう問いかけた。「子どもさんは、どこの学校に通わせるつもりだね」

オカリナは微笑んで答えた。「さあ……まだ色々、考えてる最中です」

トランペットは頭をブルンブルンと振った。「悠長に構えていてはいけませんよ。そういうことはさっさと決めないと。もう今までみたいに我々が呑気に生きていける時代じゃないんだ。子どもの教育は、早いうちからきっちり計画を立てておくものだよ」

「どこの学校へやるのがいいですかね」とわたしが聞いた。

「そりやもう、『線路の向こう側』の学校に決まってるじゃないか！」目を輝かせてトランペットは叫び、他のみんなはへやれやれ、またやつこさんの病気が始まったVと言いたげに苦笑いをもら

して互いの顔を見合ったのだが、トランペットは構わずに続けた。「できるだけ早いうちに、あっちの共同体に入っておいた方がいいって」

『「こっち側」の共同体ではいけないんですか?』とオカリナが問うた。

「話にならないよ!」トランペットは憤った。「子どもさんの将来を考えるんだったら、『向こう側』の教育を受けさせ、『向こう側』の文化の中で成長させ、『向こう側』で人脈を築かせ、『向こう側』の人間として生きていかせるのが一番だよ!そんな、こんな『こっち側』みたいな所で生まれ育っても、しけた人生が待っているだけだよ。うちの息子だって、今では『向こう側』で働いているが、そりやもうえらい出世ぶりなんだからね。『こっち側』には行き止まりしかない。それにひきかえ、『向こう側』には、成功への切符がそこら中に転がっているんだからね!」

空気がすっかり冷え切ってしまった。静まり返った部屋の中に、トランペットの熱の籠った演説が朗々と響いていた。オカリナは顔を伏せて、黙々とセロリを齧っていた。

やがて、酒が回って来た出席者たちは次々と席を立ち、自然発生的にダンパが始まった。わたしも久々に踊りたかったのだが、オカリナは身重で踊れないので、彼女を連れて帰宅することにした。オカリナは「私は一人で帰るから、ダンパに参加していいよ」と言ってくれたのだが、そうはいかない。

「あいつ(トランペット)はキチガイなんだから気にすることはないわよ」帰りの挨拶をした時、チューバ嬢はそう言った。「何が『線路の向こう側』よ!あんなところはクソの山よ」

しかしわたしは、『向こう側』に居さえすれば人生安泰だと安直に考えるトランペットも、『向こう側』に対してとにかく冷笑的な態度をとろうとする彼以外の人々も、どちらにも賛成できかねるな、と感じていた。そしてどうすれば一番子どものためになるのか、わかりかねていた。私やオカリナのように、『線路のこっち側』の人間として生きていく方が幸せなのか、はたまた『線路の向こう側』へ行き、その人間として生きていく方が幸せなのか。

——わからなかった。

懐かしい歌の旋律を奏でる笛の音と、少しずれ気味の太鼓の音が響いてきた。ムラノカミはもう天から舞い降りたようで、雲が消え去り綺麗な満月が顔を見せていた。その下で、ほろ酔いの村人たちが踊り続けていた。

7

秋が来た。

秋が来たというのは、空の色でわかるものだ。夏空と秋空には歴然とした違いがある。わたしは秋空が好きだ。人は秋空を見上げると悲しくなるといふけれど、わたしは夏空の方がよほど悲しいと思う。どこまでも澄んだ青色で、その青色を見ているとまるで時間が停止しているかのような気分になるし、山の端には、もうすぐ雨と雷になりそうな真っ白い入道雲が立ち上っている。夏になると思い知らされるのである、自分がどれほど多くのものをなくしてしまったかということ。

秋空には奇妙な色がついている、と思う。ほとんど感知できないほどに薄いセピア色、それが

秋の太陽光線が孕んだ色使いであると思うのだ。その色の存在に何かの拍子に気づいた時、わたしはしみじみと思うのだ、「もう秋だなあ」と。

しかし残念ながら、今年の秋はそれを感じることができない。なぜならば、空一面に七面鳥の大群が浮かんでいて、これがまるで分厚い雲のように太陽の光を遮っているからだ。

わたしは線路端に立って、間拔けな顔つきのままでそんな空を眺めていた。先日のわたしたちのように、あの七面鳥たちもヘリウム病に侵されてしまったのだろうか。

空の色の変化はついぞわからなかったが、他に目に見える変化があった。トランペット氏ご自慢の息子さんが、とうとう文無しになって『線路のこっち側』に戻って来たのである。トランペットの口ぶりから、わたしはその息子を精悍で堂々とした若者なのだと馬鹿正直に信じていたのだが、実際は萎びたセロリのような、飢餓状態のニワトリのような、そんな雰囲気の方であった。

後にわかったのだが、トランペットは「息子は、『向こう側』で青年事業家として大活躍している」と吹聴して回っていたのだが、実際のところは彼の息子は日雇いのバイトで食いつなぐのが精一杯で、住むところもなく路上で暮らしていたのだと言う。それどころか、他の路上生活者たちからは「余所者」として疎まれ、散々な扱いを受けていたのだという。

「当たり前よ！」チューバ嬢は、毒々しい口紅を塗った唇を思いつきり広げて大笑いした。「だいたい『こっち側』の人間が『向こう側』に行ったところで、人間らしい生活をさせてもらえるはずがないじゃないの！ケツを蹴つ飛ばされて、ドブに叩き込まれるのがオチよ！」どうも彼女は年を負うごとに、言葉遣いがワイルドになっているようである。

それからしばらくの間、トランペットの息子は生気を失ったような顔のままで仕事もせずにごらぶらしていたが、いつの間にか姿を消していた。蒸発したとか、精神病院に入れられたとか、様々な噂が乱れ飛んだが、結局のところ彼がどうなったのかは誰も知らない。

そして、トランペットがわたしの家に夕食を食べに来ることもなくなってしまった。

8

やがて冬が来た。

木枯らしが街路を駆け抜ける頃には、七面鳥たちは空からすっかり姿を消してしまった。

消えた七面鳥はどこに行ってしまったのかと言うと、わたしたちの胃袋の中である。十二月下旬のある日、体内のヘリウムガスがなくなってしまうた七面鳥たちは、次々と地上に落下していった。わたしたちは、町中に散らばっている七面鳥の死体をめいめいの家に持ち帰った。そしてクリスマスの夜に、それを食卓に供したのだった。

わたしもオーブンで七面鳥の丸焼きをこしらえた。付け合せは、もちろんカタツムリである。わたしとオカリナは冷蔵庫の中に残っていたカタツムリを洗いざらい全部鍋に放り込み、塩茹でにした。それはそれは素敵なクリスマスのディナーだった。

カタツムリがすっかりなくなった冷蔵庫の中は、サン・デクジュペリの『星の王子様』のラスト近くに出てくる閑散とした砂漠の情景を思わせた。王子は砂漠の真ん中に静かに倒れ、そして帰っていったのだ。

わたしは、そつと冷蔵庫の扉を開めた。

七面鳥にかわって、今度はブリの群れが空を覆い尽くすようになった。ブリは海を泳ぎまわるように空を泳ぎまわっていた。わたしは釣竿を持って表へ出て、空に向かって釣り糸を投げた。そうすれば、面白いほど容易にブリを釣り上げる（釣り下げる？）ことができるのだった。これはオカマのハモニカが発見して広めた漁法で、夕暮れ時、そろそろ夕飯の材料を調達しなければならなくなる頃になると、誰もが釣竿を背負って家から出てきて、空に向かって一本釣りを試みるのだった。

わたしとオカリナは、ブリと大根を使って鍋一杯のブリ大根を作った。大根は、チューバの親父さんがわたしたちの出産祝いにくれたのだった。彼は「何でも、好きな野菜を持って行ってくれ！」と鷹揚に言ってくれたので、わたしとオカリナは、台所に溢れかえっているブリに最もよく合う野菜、大根を所望したのだった。

わたしたちの子どもは、まだ大根を食べることはできない。オカリナのお乳が、彼のご馳走である。まだ生まれて間もないその小さいきものは、母親の胸に顔を埋め、静かに寝息を立てている。ひしめき合うブリの間を縫って雪が舞い落ちていたある夜、彼はやつとわたしたちの世界にやって来てくれたのだった。

わたしは夕暮れ時になると、彼を乳母車に乗せて散歩に出る。空を見上げれば、ブリだらけである。家々の屋根は雪で白く染まり、砂糖菓子のような外観。そして、木々は枯れた腕を冷気の中に差し伸べている。彼は、寒さのせいで風邪をひかぬようにとオカリナが用意した毛布と毛糸の洋服にくるまって、目の前に広がる大きな世界を食い入るように眺めたり、小さな寝息を立てながら夢の中で遊んでいたりする。わたしはゆっくりと乳母車を押しながら、線路沿いをてくてくと歩いてゆく。時折立ち止まり、空を見上げる。ブリたちが、縦横無尽に泳ぎまわっている。吹き付けてくる木枯らしが痛い。

取りあえず、早くこの子に春を見せてやりたい。生まれたばかりの彼はまだ、春すらも知らないのだ。家々の屋根からは雪が消え去り、もはやわびしい砂糖菓子ではなくなり、そして木々は老人から若者へと変貌を遂げ、新しい芽をつけた逞しい腕を空に向かって伸ばしている、そんな素敵な季節。何よりも先にわたしはまず、彼に春について教えてやりたい。今はただ、そう思っている。

偽善の村

※この作品は元々、全七楽章から成る組曲『偽善の村』（岡田文弘作曲）の鑑賞を助けるために書かれた。脱稿時は、僕は本作を『音楽と相互に補完し合う』ことを意図した散文』と見なしており、これ自体が独立した作品であるとは考えていなかった。そのため最初はこの短編集に収録するつもりもなかったのであるが、まあ幕間の息抜きにでもなるやもしれぬ、と考えたので、結局入れることにした。

1 朝の儀礼

偽善の村にも朝は来る。春の雪解け水が流れてゆく。しかしそれは本当は雪解け水ではなく、ただの生活排水であることを誰もが知っている。が、指摘することはない。

川べりを散策している少女は耳をすます。小鳥の鳴き声をかき消すように、不穏な音が聞こえてくる。軍用ヘリコプターが訓練をしているのだ。村人たちは誰もその話題に触れないが、もうすぐ戦争が始まるのである。

2 官営の楽隊

官営の楽隊はお気楽だ。彼らは全員アメリカからの帰国子女で、国からのお墨付きを得た「選任芸術家」たちなのである。毎月うなるほどの金をもらい、若い頃の遊蕩の費用から老後の生活費までが保障されている。唯一の欠点は、楽隊でありながら楽器が演奏できないこと。しかし、楽器が使いこなせるかどうかなど、些細な問題にすぎない。シンセサイザーの自動演奏でごまかせばよいのだから。

彼ら楽隊の役目は、村人たちを啓蒙することと、行政の方針を宣伝して回ること。彼らは世の中をよくするという崇高な目的を掲げる一方で、どうせ愚鈍な村人を相手に演奏するのだから適当にやればいいんだよ、と赤い舌を出した。

もつとも、日頃は馬鹿みたいな善人顔でその日その日を暮らしている偽善の村の住人たちは、実は啓蒙など必要ないぐらいのスノップ揃いなのだが、まるで国家に騙されているふりをするところが一流のユーモアセンスの発露であるかのように、楽隊の撒き散らす騒音に歓声を上げ、良識ある村民として行政の方針に従う演技を続けている。腹の底では、嘲り笑いをもらしながら。

3 夜明け前の駅にて（詩人の旅立）

詩人は駅に立っていた。彼は大都会を目指していた。まだ夜明け前で、よく研いだナイフよりも鋭利な冷気が彼を切り刻んだ。詩人は村を出ねばならなかった。なぜなら、彼は偽善者ではなかったからだ。

詩人は、少女に恋をしていた。少女も詩人と同じく、この村においては珍しい、偽善者ではない人間であった。詩人はまず少女の美しさに打たれ、そして次に彼女の心に揺さぶられた。毎夜

毎夜、またたくまに何千編という恋愛詩が生まれた。

しかしそれは適わぬ恋であつた。少女は、詩人の人間性とは対極にある男——普段は好青年を装っているが、本当は無骨で粗雑で、そして偽善者で、しかし逞しく美しい男——に恋をしていた。少女は詩人に言つたものだ。——自分でも思います、本当は貴方を愛すべきなのだ——でも、私の気持ちは私にとつてもままらないものなのです。ごめんなさい。

詩人は恋をするには醜すぎる男であつた。だから、彼はこれから赴かんとしている大都会に大いに期待していた。大勢の人が暮らしている大きな街には、自分にお似合いの、そして、自分を必要としてくれる、醜い娘がきつといるはずだ。今朝の彼は、珍しく希望に満ち溢れていた。始発電車が、彼を新天地に導いてくれるのだ。恋の可能性のある新天地に。

しかしどんなに素晴らしい醜い娘を探し出したところで、あの少女への想いを断ち切ることはできないであろうことを、彼はわかつていたのだつた。

4 長老の住む谷底

村の長老は谷底に住んでいた。彼はその飄々とした生き様と立派な顎鬚から、偽善の村に住むあまねくすべての人々から一目置かれていたが、彼はそこまで偽善者というわけではなかつた。

長老はスープを作るのが得意であつた。スープの具は、肉団子と野菜である。しかし、肉団子も野菜も、どちらも出所の知れない食材であつた。野菜の方は、どうもペンペン草らしいと確定されているが、肉団子の方は、一体何の肉なのかいまだに解明されていない。このスープを振舞われるのを誰もが恐れているため、長老の住む谷底へ行くとする村人は誰一人としていない。

5 森の機織り娘

機織り娘は森の奥深くにある一軒屋で、来る日も来る日も機を織つて暮らした。数年前に母が死んで以来、彼女は一人きりだつた。彼女の織つた機は市場で高く売れていたので、彼女は裕福であつた。その気になれば彼女は町の一等地に立派な邸宅を建てることも可能であつた。しかし、どういうわけだか彼女は森の奥深くの古い家に住み続けていて、来る日も来る日も機を織つていた。

そんな彼女はよく男たちのからかいの種にされた。ある歌うたいなどは、彼女が堀の上から落ちてきた「タマゴ男」に押しつぶされるといふような内容の曲を作り、彼女の家の周りを回りながら繰り返し繰り返し歌い続けた。歌うたいはこうした嫌がらせ行為を「表現の自由」と称して自己弁護し、批判するものはファッショだと決め付けた。しかし機織り娘はにやにや笑つてその歌を聞いているだけであつた。

変わり者で有名な彼女だつたが、求婚してくる男もいた。男は毎日森の奥深くへ分け入り、彼女の家の前でセレナーデを歌つた。機織り娘は言つた。——あなたは好青年らしく振舞うし、逞しくて美しいけど、本当は無骨で粗雑で、そして偽善者じゃないの。私の信念はそんな偽善者を許さないわ！——男もやり返す——なにが「私の信念」だ。きみだって偽善者じゃないか——娘は笑い転げながら答える。——ええ、仰る通り、偽善者よ！

6 少女の鎮魂歌

詩人が出て行ってしまった今では、少女は村で唯一、偽善者でない人間だった。孤独の苦しみ
が、彼女を内側から少しずつ蝕んでいった。

少女の恋人は、戦争が始まるなり徴兵され、戦地に赴いた。出征前夜、彼は少女の元には行か
なかった。彼が本当に愛していたのは少女ではなく、森の奥深くに住む機織り娘であつたのであ
る。それは偽善者である彼の生涯でたった一度だけの、偽りのない本当に誠実な恋であつた。し
かし大方の誠実な恋がそうであるように、それは成就しなかったのだった。少女の恋と同様に。
彼は帰って来なかった。骨すらも何処かに四散してしまつた。国に命を捧げた功績として、階
級が二つ上がったという連絡が彼の家族に届いただけであつた。

村中の誰もが、彼の家族と彼の恋人である少女の不運に同情して涙を流し、この悲劇的なドラ
マを心行くまで楽しみつくした。歌うたいはこの悲劇を歌にし、小説家は小説にし、さらに多く
の村人たちがたつぷりと涙を流した。他人の不幸は、偽善の村では最高の娯楽であつた。それは、
何も偽善の村だけに限つたはなしではないのだろうけれども。

少女は殺風景な部屋の中に閉じこもり、日々をやりすごした。カレンダーをめくることもなく
月日は過ぎ、やがて少女は今の季節すらもわからなくなった。

ある日の午後のこと。突然、少女の口から歌があふれ出した。それは、少女が、かつて一度だ
け聞いたことのある歌であつた。彼女の母親の葬式の時、どこからともなく聞こえてきた歌だつ
た。

少女は、肺に残つた最後の息を、歌にかえて吐き出した。その旋律は部屋を漂い、かすかに窓
を揺らした。その窓の外に広がっている季節が何なのか、少女は知らないままだった。
か細い少女の声が消え入ると、彼女も消えてなくなった。あとには何も残らなかつた。

7 さよなら、偽善の村人たちよ！

森の機織り娘は窓を開けて、口をつぐんだままで家の周りを回っている歌うたいに声をかけた。
今日は「タマゴ男」の歌は歌わないの？黙りこくって歩いてるだけじゃない——

——いやあ、困つたことになつたんだ。歌どころじゃなくて——と歌うたいは言つた。——つ
いに来ちまつたんだよ、召集令状が——

——おめでとう！！——機織り娘は万歳をした。

——めでたいと思うか？——歌うたいは言つた。

——思わないわね——機織り娘は肩をすくめた。

——死ぬのはごめんだ——歌うたいは本心を言つた。

——じゃあ逃げましょうか？——こともなげに、機織り娘は言つた。

——やってみるか。——と歌うたいは言つた。——あんたもついて来いよ——

こうして歌うたいと機織り娘は、誰にも知られることもなく、こっそりと偽善の村を後にした
のだった。そして森の奥深くには、今にも崩れそうな廃屋と、巨大な機織り機が残された。

村人たちは正義の名の下に、裏切り者二人を憎んだ。市場に出回っている機織り娘の織つた反

物はズタズタに引き裂かれて、広場の真ん中で燃やされた。かつて歌うたいが作ったはやり歌を口ずさんだ者は反逆罪で投獄された。許せない！なんて奴らだ！兵役拒否の、ゴクツブシ！正義の名の下に、倫理の名の下に、良識の名の下に許せない！！

——しかし、内心では誰もが彼らを羨んでいた。みんな、こんな場所にはいたくないのだ、偽善の村になど。それにも関わらず、村人たちはそこから逃れることができない。たった一つの善行も、たった一つの悪行も積むことができぬまま、彼らは微笑みながら悪態をつき続ける。昨日も、今日も、明日も、明後日も。

……さて。肉団子と野菜入りのスープが出来たよ。食べて行きなさい。

フィッシュボーン・スープ

一晚寝れば快癒すると踏んでいたのだが、結局、アバラの痛みは治らなかった。しかしそれは、決して心地の悪い痛みではなかった。ただ、言い知れない哀しさがそこにあった。大気を漂っていた何か質感をともしなわないものが、私の中に降りて来てそのまま居座ったようだった。私はインスタントコーヒーにつめたい息を吹きかけて冷ましなが、少し伸びすぎた爪の先を眺めている。窓の外は青空が広がっているが、この部屋の中は不思議と薄暗い。

台所では、私の姉が魚を焼いている。小ぶりのアジを二匹フライパンの上に乗せて、オリーブオイルとレモンで香りをつけて、鼻歌を歌いながら。なんて平和な光景なのだろう。なんて心落ち着く風景なのだろう。しかし釈然としないのは、私には姉などいないという、動かしようのない事実である。

そう、私には姉はいない。その代わり、兄がいる。パリの街で、五羽の鶏といつしよに暮らしている兄。

目をつぶれば 兄の生活ぶりが頭の中に浮かんでくる。風が吹けば倒壊してしまいそうなぼろアパートの一室。鶏たちは毎日新鮮なたまごを産む。朝の光が、たまごの殻の曲線をなぞってゆく。兄はそれを拾い集めて、ベッドの上に積み上げる。そして、煙草に火をつける。煙が目にしみて、彼は顔をしかめてみせる。兄はたまごの殻に埋もれて眠るのだ。山とつもったたまごの殻は、まるで割れた石膏像の破片のよう。

私は目を開き、ため息をつく。私も彼を真似て戯れに喫煙でもしてみようか、とも思う。

まだ私が小学校低学年の頃のこと、夏休みのある日に、兄が動物園に連れて行ってくれたことがある。

今では、その思い出の輪郭はぼやけきつてしまっている。しかし、六本足の羚羊の檻の前に立っていた時の記憶だけは、いまだに鮮明に思い出すことができる。白い太陽光線が地表を覆い尽くしている、真夏のある日のことだった。

私は左手でソフトクリームをしつかり握り締め、右手で麦藁帽子に付いているリボンを絶えず触っていた。兄は真っ白なシャツを着ていて、太陽の光がその白色に反射して眩しかった

六本足の羚羊は二頭いて——おそらく親子だろう、と私は思っていた——薄暗い檻の片隅で、静かに身を寄せ合っていた。六本足の羚羊の目は夏の晴れ渡った空のように澄み切っていて、形容しがたいものがなしさを湛えていた。

兄の白いシャツと、六本足の羚羊の角と、夏の日差しが眩かった。忘れられない。

……というように出を私は抱いているのだが、それについて語るたびに私は周囲

の人々から冷笑されるのである。彼ら曰く、「六本足の羚羊は架空の動物よ。動物園なんかにいるわけじゃないじゃない」そして彼らは、きっと私が何か他の動物を六本足の羚羊だと勘違いしたか、もしくは夢で見た情景を実際の思い出と勘違いして記憶しているのだ、と結論づけるのであった。しかし事実私は、大人になった今日に至るまで、繁華街のスクランブル交差点、喫茶店の窓の外、夕ぐれのを空をバックに聳え立つ高架橋の上、私が暮らす家の庭などで、六本足の羚羊がゆつくりと歩いてゆく姿を見かけたことだってあるのだ。

しかし、いくら私が六本足の羚羊の実在を力説しても、親も友人も、それどころか、いっしょに六本足の羚羊を見て、六本足の羚羊について話をしてくれたはずの兄すらもが、私の演説をたわいもない笑い話として片付けてしまうのだった。

兄は時々、思い出したように絵葉書を送ってくる。絵葉書の裏面には、古めかしい格好をした貴族の女性の肖像画が描かれている。私は彼女の何を一つ知らない。ひだの多い花柄のドレスに身をつつんだ、決して美しいとは思えない中年女性。落ち窪んだ目、鶏がらのような手足、何の弾力もなさそうな肌、そしてそれを覆い隠さんとして過剰に施された悪趣味な化粧。おまけに、エスカルゴを模した珍妙な帽子を被っている。彼女の顔に刻まれた皺を見ると、滑稽な、その一方で悲しいような気分になる。とは言え彼女には奇妙な威厳があり、気の弱い私などは思わず気圧されてしまう。そう、彼女は実に威厳のある女性だ。実に。

※

というわけで私には兄はいるのだが、姉などいない。それなのに、台所からは彼女の鼻歌と、魚の油がフライパンの上で撥ねる音が響いてくる。「アバラ、まだ痛いのか？」姉はそう私に呼びかける。「ちよつとだけ痛い」と私は答える。

「やっぱり、手術の影響がまだ残ってるのか？」姉は憂いを帯びた声でそう尋ねてくる。少し低めの、透明感のある声だ。「ううん、わからない。」と私は答える。

私はカーテンを少し開けて、表を見てみる。抜けるような青空なのだけど、遙か彼方には入道雲が見える。もくもくと立ち上った、不気味な入道雲。

そして私は、ある詩人が「入道雲は、汚水を含んだ川のおぼくみたいで嫌いだ」と詠っていたことを思い出す。私はカーテンをしめる。

※

たんたん料理を続ける姉は、部屋の隅のCDコンポからこぼれ出している音楽——エリック・サティのピアノ曲——に合わせて鼻歌を歌っている。

そのCDは、ダニエルが私の誕生祝にくれたものだ。

ダニエルは私の友人で、同じ劇団に所属している。彼はアルビノ特有の真っ白い髪の毛に、緑色のペンキで縞模様をつけているのが塗り上げているのがトレードマークだ。

ダニエルは役者なのだけれど、演技よりも書き割りにペンキを塗る方が得意なので、もっぱら

大道具係として活躍している。でも、ダニエルはそのことに不満のご様子。「まったく、ぼくは舞台に立つために劇団に入ったのに」ダニエルはそうこぼしながら、毎日から晩までせっせとペンキを塗っている。そんなダニエルの愚痴を耳にするたび、私たち劇団員は顔を見合わせ、プツと噴出す。なぜなら、ダニエルの演技は大根もいいところ。それに、大のあがり症。泣かせるセリフで客を笑わせ、笑わせるセリフで客を冷めさせ、棒杭みたいに立ち往生。困ったものだと座長も苦笑いしている。

ダニエルは謎に包まれた人物だ。頼るあてもないままに日本にやって来て、渋谷駅前の一角（よく、街宣車に乗った右翼の活動家が演説をしている場所）でデタラメな歌を歌っていた。アボガドに頭つつこんで、三人の御者は大慌て。オー、花壇の花がみんな萎れた、こいつはのジャック仕業だぞ。ジャックつかまえて縛り首、ジャックの母さんろくろ首。と言った具合。

そう、彼は堂々とした態度で歌を披露していた。ギターを爪弾くことも無く、アカペラで。まったく意味のない単語同士を嬉々として連結させて。誰も足を止めないというのに、一日中。もともと声帯が頑強ではなかった彼は、すっかり喉をつぶしてしまった。それでも、彼は情けないしやがれ声で歌い続けた。

劇団に入ってから、彼は暇さえあれば意味不明なフレーズをハミングしている。着ている服を極彩色のペンキでべたべたにしながら、彼は自分の世界にもぐりこんでしまう。そうになると、もう手のつけようもない。たまに、傍を通りかかった人に、何の意味もなくバケツ一杯のペンキを浴びせかけたりもする（私も以前やられたことがある。おろしたてのTシャツが、一瞬で台無しになってしまった）。困ったものだ、と座長も苦笑いしている。

でも私は、そんなダニエルが大好きだ。

※

ダニエルの恋人のキヌコ——うちの劇団に欠かせない名女優——は、私の大の親友だ。腰まで垂らした長い髪の毛の右半分は美しい黒髪で、左半分は目の覚めるような赤毛。光り輝くエナメルスーツに身を包み、食べるとハイになるクッキーを常備している（彼女曰く、そのクッキーはかのウィリアム・バロウズが『裸のランチ』を執筆した時に好んで食べていたものだそうだ）。そして面白いことに、スコットランドに行った事もないのに、英語をしゃべるとなぜかスコットランド訛りになる。英国人のダニエルですら、「キヌコの訛りは完璧だ」と絶賛する始末。

キヌコはクッキーの力も手伝っているのか、いつも明るく愉快に振舞っていて、時にそのテンションの高さが回りにいる私たちを疲れさせたりもする。一度など、夜通しクッキーとウイスキーを摂取し続けたせいでタガがはずれ、傍に居合わせたダニエルをものすごい力でねじ伏せると、電気剃刀と裁ちばさみを使って彼の頭をスキンヘッドにしてしまった。翌朝素面に戻った時、キヌコは呆然と横たわっている坊主頭のダニエルを前にして、こらえ切れずにそこら中を笑い転げながら必死で謝り続けたのであった。

一見何の悩みも抱えていないように見えるお気楽なキヌコだが、実は彼女はナルコレプシーに

悩まされている。高校の時以来の持病だそう。そのため、彼女は本当にいい役者なのだけれども、稽古をしている時はもとより、あろうことか本番の舞台の上ですら眠り込んでしまうことがある。長いセリフの途中でふっと黙り込むと、まるで棒杭のように「ばたん」と床に倒れこんでしまうのだ。黒髪と赤毛が空気を孕んで舞い踊り、横たわる彼女の真っ白い横顔を覆い尽くす。あんなに耽美的な光景を、私は他に見たことがない。

しかし笑い事で済まされないこともある。入浴中にナルコレプシーの発作が起こった時は本当に危なかったそう。たまたまその時はダニエルが一緒だったから間一髪で助かったものの、下手すれば確実に彼女は浴槽の中でその生涯を終えてしまっていたことだろう。

気持ちのよい秋のある日、ダニエルがキヌコのアパートに遊びに来た。キヌコはダニエルといっしょにリビングのソファに座り、白ワインを飲みながらぼんやりとテレビを観賞した後、シャワーを浴びて来ると言って席をたった。ひとり部屋に残ったダニエルは、この後繰り広げられる予定の快楽的な遊戯の模様を *imagen* して胸ときめかせつつ、白ワインを飲み続けていた。しかし彼女がいつまでたっても戻ってこないの、段々と不安に駆られるようになった。ついに腰を上げて風呂場に向かった彼が目にしたものは、二色に色分けされた豊かな髪の毛を水の中に躍らせてうつ伏せに沈んでいるキヌコの姿だった。

ダニエルの迅速な対応で、キヌコは一命を取り留めた。しかし彼女はなんとなくその事を不満に思っているようでもあった。

※

一度、キヌコとダニエルと私でピクニックに行ったことがある。

私は二人に誘われた時、「お邪魔虫になるからやめとくよ」と言ったのだけれど、二人は笑って「そんな気を使うことないよ」と取り合わない。

「丁丘に登ろう。あそこはなにしろ、空気がいいからね。肺を洗濯するにはもってこいの場所だよ」ダニエルは爪を磨きながらそう提案した。

「そう、丁丘はいいわね。あそこは太陽の色が特別キレイに見える場所だものね。太陽光線を浴びながらお茶を飲むと格別よ」キヌコは、赤と黒に別れた髪を梳かしながらそう言った。こうして私たちは丁丘に行くことになった。

ダニエルが車の運転をし、キヌコが得意のニワトリ料理と紅茶を用意し、私がサンドウィッチを作ってくることになった。私は当日の朝四時に起き、サンドウィッチ作りに取り掛かった。私は小食なのだけれども、ダニエルとキヌコは相当な大食漢だ（それなのに二人とも、あんなに痩せているのが不思議）。いっぱい作って行かなければ！

私は大量の食パンをスライスし、台所にある中で一番巨大な鍋でたくさんのお卵を茹で、冷蔵庫いっぱいを買っておいした胡瓜を切り刻んだ。たちまちにして台所は、薄切りにされたパンと胡瓜の山に占拠されてしまった。

私は巨大な鍋からすくい上げた固ゆで卵を、これまた巨大なボウルに移し、マヨネーズをたっぷり混ぜながら力任せにすりつぶした。すりつぶしながら、私は戯れに歌を歌った。こうして歌っているうちに、凍っているバターも溶けてパンに塗りやすくなることだろう、私はそう思っ

た。

タマゴ、タマゴ

コロンプスの卵

地球は回る、くるくる回る

タマゴ、タマゴ

コロンプスの卵

タマゴの中で、地球は回る

表がぼんやりと明るくなってくる頃に、仕事は完了した。私の眼前に置かれた、大きなバスケット三つにギッシリ詰まったサンド・ウィッチ。素敵な朝だ、と私は呟いた。

※

ダニエルのバンに乗り込んだ私たちは、市街地を出てから高速を二時間ほど走ってT丘に到着した。私はてっきり歩いて丘を登るものと考えていたので登山靴を履いてきたのだが、ダニエルは頂上まで車で一気に駆け上がったしまった。「僕は文明人なもので、歩くのが苦手なんだ」とダニエルは言う。「単なる体力不足でしょう」とキヌコがすかさず応酬する。

T丘の頂上は、ダニエルが言っていた通りの素晴らしく綺麗な空気と、キヌコがいつていた通りの素晴らしく綺麗な太陽の光で満ち溢れていた。踏みしめると足の下で草が擦れ、青くさくも心地よい香りがたちのぼってくる。連なった巨大な山々が、私たちの眼前にどこまでも続いている、その輪郭と空とが溶け合い混ざり合っているように見えた。漂う雲は靄となって四散し、その向こうには青空が鮮やかに広がっていた。丘の麓には小さな集落があり、そのちっぽけな佇まいはジオラマや箱庭以上にジオラマや箱庭のようだった。ああ、なんとちっぽけな人々の営みなのであろうか。こんなに大きな空の下で、今更何をやろうとしているのだろうか。

私たちは露に濡れた丘の斜面に無造作に座り込み、バスケットの中身を広げた。楽しい茶会の時間の始まり。

サンド・ウィッチはなかなか好評で、私はほっと胸をなでおろした。しかしなんと言っても、キヌコのニワトリ料理が絶品だった。キヌコは慣れた手つきでナイフをくるくると回し、ブラウンライスの詰め物をタップリと孕んだ肥満体のチキンを切り分けてくれた。この間オープンをしたのよ、と彼女は嬉しそうに言った。そのせいか、前よりもうまく焼けるようになったと思うわ。今度は七面鳥の丸焼きを作ってあげるからね。七面鳥が入るなんて、ずいぶん大きなオープンね！私は歓声を上げた。

返す手でキヌコは、紅茶の入った水筒を取り出した。ここへ登った時は、必ず頂上でこのお茶を飲むことにしてるの。なるほど素晴らしく美味しい紅茶だった。何か変わった成分でも入っているのか、体が軽くなったような、それでいて重くなったような、まるで自分の全てが自分を離

れてしまうような、そんな感覚に襲われた。このお茶といっしょに、これ（と言って、キヌコは常時齧っているクッキーを差し出した）食べてご覧。ぶっ飛ぶから。言われるがままに私はクッキーを受け取って、口に放り込む。奥歯の上で砕けるクッキー、そこに温かい紅茶を流し込む。すると途端に、晴れ渡った夏の青空がぐるぐると歪んで回転し始める。確かにこれはすごいや、と私は思った。私が作ったサンド・ウィッチが空中に舞い上がり、風船に変身した。それを見てダニエルは笑い転げ、斜面をころころと転がりながらカメラのシャッターを押し回っている。「一体何を撮ってるの、ダニエル？」「決まってるじゃないか。太陽の真横に巨大なスモモが浮かんでるだろ。あれを撮ってるのさ」「あなた本当にバカね！」キヌコは肩をすくめる。「あれはスモモじゃなくてバナナよ！」そうなのだろうか。私には苺に見えたのだけれど……。

風船になったサンド・ウィッチはしばらく雲の間を浮遊していたが、やがてお互いにくっつき合い、溶け合い混ざり合いしだした。そのうち、その風船の集合体は二体の巨人を形成し始めた。輪郭がはっきりと見えてくる頃には、私は二体の巨人が布団職人であることに気づき始めていた。その上、彼らが布団の製造方法をめぐって根深い対立をしているらしいことも、なんとなくではあるが推測できた。彼らはお互いを痛罵し合い、両手一杯の羽毛を投げつけ合った。たちまち、そこら中の山の上に雪のような羽毛が降り注いだ。真夏に降る雪には、なぜこんなに心がときめくのだろう。私は思わず頭の上に降って来た雪（羽毛）に手を差し伸べたが、それはあと数ミリで触れられるところでふっと消えてしまうのだった。

そう、消えてしまうのだ。大量の羽毛が吹雪のように激しく舞い踊っていたが、それらは私たちに触れることなく、次々と大気に拡散していくのだった。ダニエルとキヌコはその光景を見て、頬を寄せ合い無邪気に笑い合っていた（ひよつとすると、彼らは彼らで別の何かを見ていたのかもしれないが）。

※

やがて羽毛が一つ残らず消えてしまい、二人の巨人も何処かへ姿を消してしまうと、私たちは強烈な倦怠感に襲われた。ダニエルとキヌコと私は丘の斜面に川の字になって寝転がり、空を見ている。青い空を背に、白い雲が信じられないほどゆっくりとしたスピードで流れていた。

「疲れたね」キヌコが言った。

「うん」ダニエルが答える。

『「死んだふり」でもする？』とキヌコ。

「ああ、そうするか」ダニエルは大きく頷いた。

「貴女もする？」

「ええ、やってみる」と私。

「それじゃ久しぶりに、『死んだふり』でもしますか」

そこで私たちはめいめい思い思いの場所に身を横たえ、『死んだふり』をし始めた。ダニエルは不自然に体の間接を曲げ、キヌコは白目を剥いて髪の毛を振り乱した。不器用な私はなかなか二人のようにうまくはやれなかったけれど、それでも懸命に死体の気分になろうと努めていた。

それからどれぐらい時間が流れたことだろう。抜けるような夏空の下で、私はいつしか死んだ

ふりに没頭していた。自分がもうすでに死んでいるのだと仮定することは、何ともいえない寂寥感と陶酔感の狭間を漂っているようで心地よかった。ひよっとすると、私は今本当に死んでいるのかもしれない。あるいは、私はすでにとうの昔に死んでしまっていたのかもしれない。ぽっかりと浮かんだ所在ない虚無の中で、私は静か過ぎるほどに静かな「死」に包まれていた。まだ私が胎児だった時も、こんな風にして羊水の中を漂っていたのかしら。あんまり夏の空がきれいだったので、そんな風に感じるのだろうと思った。

ふと、首筋に温かい息を感じた。キヌコかしらと思つてそつと薄目を開けて見てみると、そこにいたのはキヌコではなく、一頭の六本足の羚羊が私の顔を覗き込んでいた。

そのまましばらく、私たちは互いの瞳の奥を見つめあつて過ごした。それが数分間だったのか数時間だったのか数日間だったのか、或いはそのような尺度では測れない時間だったのか、今となつてはわからない。やがて六本足の羚羊は私の元から立ち去り、六本の足をたくみにうごめかせながら、目にも止まらぬような速さで丘を駆け下りて行った。

※

いつの間にか私はまどろんでいたようだ。目覚めてすぐにカーテンを開けてみると、さつき遙か彼方に見えていた入道雲はすっかり拡散して消え去っていた。

「お待たせ。できたよ」

姉は磯の香りを漂わせながら、二つのマグカップと二枚の皿をいっぺんに持つてやつて来る。

二匹の焼き魚は、きれいに骨抜きをされていた。しかも、まったく身を崩すことなく。

「抜いた骨を使って、スープを作ったの。」

湯気立つマグカップを私の目の前に置いて、姉は優しく微笑んだ。なみなみと注がれたスープの底に、魚の骨が踊っている。なんだか哀しいぐらいに懐かしい気分になった。姉の瞳孔の奥には、抜けるような夏空。なんて懐かしい空の色なんだろう、私はそう思った。

「じゃあ、いただきますか」

私はスープを一口、口に含む。懐かしい味がする。エリック・サティの音楽が流れてくる。窓の外は抜けるような夏空。ああ、なんて素敵な午後なのだろう。

(二〇〇七年八月三十日)

せむし魚

温泉旅館に着いた僕は、あてがわれた部屋をぐるりと見回した。傍らに立った女主人が流暢に説明してくれる。電気のスイッチはこちらでございます、こちらがお手洗い、その隣がお風呂場となっております、この壁をスライドさせますとクローゼットになっておりまして、浴衣はこちらにご用意しております……。

僕はこうした有益な説明を何ひとつとして聞かない。右耳から入った情報は脳髄を経由することなく左耳から抜けて行く。上の空なのだ。何もかもが頭の中を吹き抜けて行くのを感じる。時折、湿気をたっぷり含んだ六月の風が吹き抜けて行くのを感じることもある。これが乾いた七月の夏風であったならば、どれだけ幸せに生きてゆけることだろう。

とは言え、ひとつだけ心に残った説明があった。女主人は棒杭のように突っ立っている僕の前で部屋の窓を開けて見せ、下を御覧なさいと言った。僕は緩慢な動作で窓際に歩み寄り、窓から首を突き出して下をのぞきこんだ。

中庭が見えた。その八〇％を水が占めていた。実に大きな池である。見ると、他の部屋の宿泊客たちが窓から釣竿を突き出し、その池に釣り糸を垂らしている。

「御覧のように中庭には釣堀が設えてありまして、お部屋にいながらにして釣りがお楽しみいただけます」女主人は、やや得意げな口調でそう説明した。「お申し付けくださいましたら、釣具を一式お貸しいたします。お魚が釣れましたら、私どもでお料理してお出しします」

なるほど、これがこの旅館の名物なのであろう。僕は女主人に僅かばかりの茶代を渡した後で、釣り道具を持ってくるよう頼んだ。

最後に釣りをしたのはいつの事だっただろう。迅速な対応で女主人が持つて来た釣竿を撫で回しながら、僕はやや感傷的な気分には陥っていた。記憶の中で僕は、この上なく美化された故郷の川でヘラブナを釣っている。中学時代のことだったろうか、あれは。ずいぶん時が過ぎたものだ。僕は先端に凶器をぶら下げた糸を窓の外へ投げた。微かな水音が聞こえた。

それなりに粘ってみたものの、釣果はたった一匹であった。とは言え、そのたった一匹の得物はなかなか素晴らしい代物であった。得物は、背中に巨大な瘤をつけていた。僕は思わず歓声を上げた。

ずいぶん昔、学生時代に読んだアメリカの小説の中に、瘤をつけた鱒に関する記述があった。その小説家は「せむし鱒」について語るために一章を割いていた。もつとも、「せむし鱒」が登場するのは、その章の最後の一ページにしか過ぎないのだが。

件のページに書かれている内容は、このようなものだ。主人公がクリークで、背中に巨大な瘤をつけた魚を釣り上げる。その瘤は幼魚の時にした怪我の痕だろうか。主人公はその魚にひどく心惹かれる。最後の一行は暗記している：『夕食に、そのせむし魚を食べた。碾き割りとうもろこしにまぶしてバターで焼いたら、瘤はエズメラルダのくちづけのように甘かった』

純朴な青年だった僕は、いつかアメリカに行った時には「せむし魚」を釣り上げてみたいものだ、という漠然とした夢を抱いた。その事を僕は誰にも言わなかった。当時、僕の周りには俄か反米主義者だらけで、アメリカへの憧れなど口にしようものなら嘲笑の的にされたからである。

早速僕は女主人を呼びつけ、「せむし魚」を収めたびくを女主人に手渡した。女主人は受け取ってその中を覗き込むと、困惑したような笑顔を浮かべた。

「お料理はどのような風にいたしましたでしょうか？」

バターで焼いてください、と僕は即座に頼んだ。それから、もし厨房に碾き割りのとうもろこしがあれば、それをまぶして焼いてください。お願いします。

僕の淡い幸福は、運ばれてきた魚の焼死体を見るなり打ち砕かれた。碾き割りのとうもろこしをスイートコーンで代用した無茶苦茶には目をつぶろう。しかし、**なぜ瘤を取り除いて料理したのか……。**

僕は、瘤がなくなったせいで痩せ細って見えるその魚を食べた。魚は喘息の時に出る咳のような味がした。

渋谷散策日記

夜の十二時に起床し、ウイスキーを飲みながら四時頃までレポート課題だのノート整理だのをこなす。それが片付けば、近所にあるファミレスに行つてハンバーグライスを食す、もしくは立ち食い蕎麦屋に行つてカツ丼セットを食す。そして帰つて来て、朝の六時頃まで小説を書いたり、ネットサーフィンに興じたりする。それから朝風呂に入る。その頃になるとだんだんと空の色が変わり始める。風呂から出て一息つく、新しい一日が始まる予感に包まれながら、布団に包まれて目を閉じる。そして就寝。

というような生活を続けていたところ、僕は見事に肥えてしまったわけである。これは由々しき事態であつた。なぜなら、現代社会をでぶとして生き抜いていくことは非常に困難な試みだからである。会う人会う人に「おやまあ、えらく太ったね!」と嘲笑まじりに言われ、健康診断では血糖値や血圧や体脂肪の値に苦言を呈される。今まで来ていた服が次々と着られなくなり、新しい服を買いに行つても合うサイズのもの一つもない。階段の上り下りが異様にしんどい。いくら食べても胃袋が一杯にならず、満腹感c/w満足感というものがない。おまけに暑い。なんたる有様であろうか。

おりしも世間はダイエットブームであつた。怪しげなサプリメントが次々と発売され、胡散臭い整体師やら美容研究家やらが次々とスターに祭り上げられた。テンションの高い元軍人が難解な踊りを踊りまくるビデオが売れに売れ、某テレビ番組が捏造データを元に「納豆を食べれば痩せる」と報じたことが社会問題となつた。挙句の果てには岡田斗司夫までが五十キロも痩せてしまった。そんな時代だったのである。

よし、それでは一つ俺もダイエットに挑戦してみるか。根が非常に単純な人間である僕は、安易にそう考えたのだった。

しかし、何をすればいいだろうか。食うのを我慢するのは論外であつた。僕にとって食べることは人生最大の娯楽であつた。夜食や間食を我慢するというのはまだ耐えられるが、シビアにカロリー計算をしたり、肉類を禁じたり、絶食したりといった芸当は到底無理だと思われた。ではやはり、運動か。しかし運動すると言つてもどうすればよからうか。だいたい、僕はスポーツなどというものは大嫌いなのである。学校の運動会や球技会は僕にとってこの上なく恐ろしい拷問であつた。

色々と考えてみた末、とりあえずウォーキングから初めてみることにした。基本的に散歩は元々好きな性分なので、これならさして苦もなく続けられるだろうと踏んだからである。次に歩く場所であつたが、当時僕は渋谷にある学生寮に住んでいたもので、とりあえず渋谷駅から109前を経由して東急 *Bunkamura* 周辺を人通りの少ない早朝の時間帯にうろついてみようと考えた。こうして、僕の渋谷散策の日々が始まつた。

——以上、前置きである。

XXXXXXXX

渋谷と言えば、ちゃらちゃらとした流行のファッションに身を包んだ若者たちのたむろする非

常に活気のあるにぎやかな街、というイメージがあり、まあ事実その通りであり、109前スクランブル交差点なんぞは人いきれで窒息死しそうになる有様なのだが、それはあくまでこの街の一面にしか過ぎない。

時間帯で言えば、終電が出て駅のシャッターが降りる午前零時頃から、サラリーマンや学生たちが通勤・通学のため家を出る六時ごろまでの数時間は、渋谷は昼間の喧騒がまるで文字通りの「白昼夢」に思えてしまうほど、荒涼とし閑散としている。ネオンも消え、モアイ像前も、ハチ公前交差点も、前述した109前交差点も、人の姿がまったくなくなってしまう。人ごみというのは渋谷の街を形成する上での主要な構成要素であり、それがごっそりなくなってしまうのだから、ほとんど異空間のようなものに変貌してしまうわけである。ルネ・クレールが作った「眠るパリ」という無声映画があり、この作品はあるキチガイ科学者が作った光線の力でパリのありとあらゆるものが静止してしまう、という一種のSFモノなのだが、深夜の渋谷、人間たちが忽然と消え去り、何ひとつ動いていない静寂の時間が流れて……いるのかいないのかわからない、その一種異様な光景は、ほとんどその映画の世界を地で行くようなものである。

そして夜が更けて、やがて朝が来るわけだが、眠っていた人々が再び動き出すその直前の荒廃した都市風景というのは、これまたものさびしいものである。僕は上はよれよれのTシャツ、下はジャージというなんとも情けないファッション（要するに、寝る時の服装のままで朝の散歩に出ているわけだ）で、その荒廃した風景の中を闊歩する。路傍にはゴミが散乱している。通行人たちが投げ捨てたゴミ、ゴミ捨て場に出された生活ゴミ、それらに何匹もの大ガラスがたかり、無茶苦茶に荒らしている。酔っ払いの吐瀉物があちらこちらに残されている（それを見てある知人は「まるで好み焼きのようだ」という感想をもらした。酷い、酷すぎる！）。そして、終電に乗り遅れた酔っ払いが、狭い路地や歩道の隅に身を押し込めるようにして眠りを貪っている。

路上で眠る酔っ払いは一見マネキン人形のようにも見え、かつまた死体のようにも見える。ぴくりとも動かず、埃にまみれ、不自然な姿勢を保ったままで、朝の冷気に身を焦がしている。枕元には、ゴミが散乱している。再び動き出すことなどあり得そうにないような深い眠り。その彼らの眠りが、早朝の都市を一層静かなものになっている。

僕が今までに遭遇してきた「眠れる森の酔っ払い」たちの中で、特に忘れがたい人物についてお話しよう。

彼は、ハチ公前交差点を右に曲がってしばらく歩いたところにある、二十四時間営業の本格派とんこつラーメン屋の前にぶっ倒れていた。おそらくシメのラーメンを食べて店舗を出たところで転倒し、今に至るまで夢見ているのであると予測される。それだけならばごくごく平凡な酔っ払いであるが、問題は彼の身なりである。概して酔っ払いはラフな格好をしているものであり、例えばスーツをびしょと着こなしたリーマンも酒が入ればこれを着崩し、挙句の果てにはネクタイを頭に巻いたり、それどころか最早スーツなど脱ぎ捨てて踊り始める、全員が全員がそんなわけではないが、だいたいそのような感じであろう。

しかし、僕が二十四時間営業の本格派とんこつラーメン屋の前で見た酔っ払いは一味も二味も違っていた。彼は見るからに高級そうな燕尾服を着込み、アイロンでビシッと折り目をつけたズボンを履き、ピカピカの革靴を履き、手にはステッキを持ち、立派な人の字髭を生やし（しかもそれをご丁寧にワックスで固め）、そしてシルクハットを被っていた。彼はピンと背筋を伸ばし、昂然と頭を挙げ、歩道の上に転がっていた。鼻が高く、目つきは鋭く、手の甲には剛毛とも表現

できそうな濃い毛が生えていた。

僕は想像してみる。バーを梯子していたこのシルクハットに燕尾服の紳士、そろそろ帰ろうかと思った途端に突然ラーメンが食べたくなつて、この二十四時間営業の本格派とんこつラーメンの店に立ち寄り、革靴特有のカツカツという足音を響かせながら薄暗い階段を降り、優雅なしかし気取った手つきで食券を買い、席に着いてご大層なシルクハットを脱ぎ、そして運ばれて来たラーメンを汗をかきかき啜りこむ。彼はいつしよにライスを食っただろうか、はたまた塩ゆで卵だの木耳だののトッピングを追加しただろうか、はたまた替え玉を注文しただろうか、それは僕のおよび知るところではない。それにしても燕尾服を着てシルクハットを被った紳士が深夜のラーメン屋にいるというのは不可思議と言えば不可思議な情景である。そしてともかく、食い終わった紳士はまた背筋をピンと伸ばし、服の乱れを伸ばし、ポマードで固めた頭の上にシルクハットを被り、店を出たところではったりと倒れた。そしてそのまま時が流れ、朝となり、ふらふらと歩いて来た僕に発見された、とこのようなストーリーが展開されていたのだろう。

とは言え、そのようなストーリーが展開されていたというのは、あまり感覚的にピンと来ない。あまりにも彼の存在が唐突かつ浮遊感あふれるものであるからだ。神様がここではないどこか別の世界に生きている紳士を、切り絵細工でもするような要領で切り取って来て、渋谷の街の一角にベタリと貼り付けた、そんな感じがする。この紳士は何処からやって来てそして何処へと行くのか、そんなありふれた問いも成り立たない。とりあえず今この瞬間紳士はここにいる。それが全部だ。

この話はここまで。特に落ちはない。とにかく、あなたもひよつとすると、いつか渋谷に遊びに行った時に、シルクハットに燕尾服の紳士と遭遇するかもしれない。その時のために、心構えをしておくことをお勧めする。

×××××

しかし早朝散歩において遭遇するのは、そんな愉快な事件だけとは限らない。時には、朝食を食べる気が失せるような光景に出会うこともある。これからそれについて語るつもりだが、それによってあなたの気分が悪くなっても僕は何も関知しない。

東急 Bunkamura の辺りを歩いている時であった。交差点にさしかかった僕は、赤信号で立ち止まった。その時、ふと靴下がずり下がってしまったことに気づき、しゃがみこんでこれを是正した。と、足元に目をやると、その辺り一面に絵の具のような、ペンキのようなものがぶち撒かれていることに気がついた。色は赤であった。一体これはどうしたことかな、そう思っているうちに信号が青になり、僕は前進した。驚いたことに、横断歩道もその塗料で真っ赤に染まっていた。これはどうしたことだろう？とふと顔を上げると、信号機の横の建物に寄りかかって座っている二人の青年の姿が目に入った。一人は裸足で、しかもその足は傷だらけであった。赤い色は、彼の足から放射線状に広がり、その辺り一帯を染め上げているのであった。

塗料ではなかった。それは血液であったのだ。

こんなにも大量の血が出るものなのか、と私は字義通り「血の海」と化している街角を、驚嘆しつつ見ていた。また、本物の血が意外にニセモノくさく見えるということも初めて知った。テレビや映画などで利用されている血糊のほうが、よほど本物の血らしく見えると思った。血を出

している本人もこの光景にリアリティを見出せないでいるせいか、存外に冷静そうな面持ちで座り込んでいた。やがて救急車とパトカーが到着し、怪我人の運搬と実況見分らしき調査を開始したので、係わり合いになりたくない私は首をすくめてその場を離れた。

離れたものの、胸中で好奇心がむくむくと頭をもたげてくる。一体彼はなぜあんな怪我を負い、街角を血だらけにしてしまったのだろう。僕は予定していた散歩ルートを変更して、独自調査に乗り出した。調査手法はいたってシンプルである。彼の血の跡をたどるわけである。

血の跡は、そこから駅の方面に向かって点々と続いていた。僕はそれをたどって歩き始めた。十メートルほど歩いたところで、血の跡は絶えた。そこには一軒のブティックが両脇の雑居ビルに挟まれるような格好で立っていた。そして、事件の痕跡が残されていた。

ブティックの入り口のガラス戸に、あきらかに人が蹴破ってできたと思しき、足の裏の形をした穴がポツカリとあいていたのである。まるでギャグ漫画にでも出てきそうな光景であった。

以上のことから話をまとめてみるとこうなる。ブティックにいた一人の青年が何らかの事情により逆上し、ドアを蹴破った。不思議なことに彼は裸足であった。青年は逃亡しようとしたが、ドアを蹴破った際にガラスで大怪我を負い、満足に走れることができなかった。血を大量に流しながら十メートルほど進んだところで力尽き、東急百貨店前の交差点にへたりこんだ。いっしょにいた彼の友人も、途方に暮れてへたりこんだ。血はどんどん流れ、街角は真っ赤に染まった。そこに僕が通りかかったわけである。

それにしても、なぜ彼はドアを蹴破ってしまったのだろうか。しかも裸足で。何が彼をそうさせたか。それは永遠の謎である。

それにしても事実は小説より奇なりとはよく言ったもので、渋谷が動き出す前、みんなが知らないうちに、ひっそりと流血事件が起きていたりもするのだ。

次にその交差点を通りかかった時には、血も割れたガラスの破片も撤去され、いつもと変わらぬ渋谷の平和な風景に戻っていた。
なんだか白昼夢のようであった。

××××××

東急百貨店の前を通過して東大駒場キャンパスを目指して歩いていると、その途中で大きな公園に差し掛かる。その公園には木々がこんもりと生い茂っていて、少し離れたところから見れば鎮守の森のようにも見える。あの109前のスクランブル交差点からたった十分ばかり歩いたところに、こんなにも緑があるとは実に Fantastic である。

その公園沿いの道が、僕の散歩コースのうちの一つである。こんもりと生い茂った木々の間から漏れる朝の光を浴びながら歩くのは、なかなか気持ちのよいもので、僕は好んでその道を通っているわけであるが、時折、僕と同様にその道を散歩コースと決めている「同志」と出会うこともあった。

左図は、同志の勇姿である。



それで、彼が何者かと言うと、まあ見ての通り亀である。おそらく彼は普段は公園の中に作られた池に住んでいて、お日様が恋しくなるとこうして外へ出てきて歩道をのたくり回っているのだらうと思われる。

いつ会っても、亀は実にひっそりと散策を楽しんでいる。そのマイペースかつ奥ゆかしい姿勢は賞賛に値するものであるが、たまにびっくり仰天させられることもある。それは梅雨の中休み、久しぶりに空が晴れたとある朝のことである。

申し合わせでもしたのだろうか、何十匹という亀の大群が一斉にぞろぞろと池から這い出し、公園を脱出し、道路を埋め尽くしていたのである。寝ぼけ眼をこすりながらそこを通りかかった僕は、自分の目を疑った。歩道も車道も亀の甲羅だらけ、足の踏み場もない有様！あたり一面、磯臭いような生臭いような空気がたちこめ、息が詰まりそうだった。何十もの亀の甲羅によって完全に道路は覆われ、まるで道路そのものがうねりながら右へ左へ揺れているように見えた。

しかし更に驚いたのは、その数分後にコック・コートを着た中年男が自転車に跨り颯爽とやって来て、その亀たちを次々と回収し始めたことである。中年男は浅黒くしわの刻まれた肌と、ギョロリと飛び出した巨大な眼球を有していた。彼は公園から見て北西の方角——その方角には、一般的イメージとしての渋谷には似つかわしくない、閑静な住宅街が広がっている——からやって来た。しかし彼が何者であるか、それは誰にもわからないし、もちろん僕も知ったことではない。

中年男は自転車からひらりと降りるなり、黙々と仕事を始めたのだった。目を見張るような手際のでさで亀を拾っては巨大なビニール袋に入れ、ものの五分ほどで全部捕獲してしまったこの英雄に、僕は畏怖の念すら抱いた。

感嘆してその仕事ぶりを眺めていた僕に、彼は白いものの混じった口ひげをひくひくと動かし

ながら、「いつら、意外にいいスूपがとれるんですよ」と言っただけに笑った。

へー、そうなんですか、意外にいいスूपがねえ。僕は曖昧に笑った。

彼の手に握られたビニール袋は、何十匹もの亀でばんばんに膨れ上がっていた。彼はそれをかつぐと、誇らしげに口ひげをしごいてみせた。

その中年男と遭遇したのは、この一度きりである。

何はともあれ、こうして渋谷の平和は、亀たちの魔の手から見事守られたわけである。

それにしても、亀というのはつくづく不思議な散策者だ。なにしろ彼らは、立ち止まったところが家になるのだから。

×××××

渋谷 Bunkamura の近くにある人気の温泉施設が爆発事故を起こしたのは、僕が散策を始めて一カ月ほど経ったある日のことだった。

大学の授業が終わり、ブックファーストかHMVにでも寄って帰ろうかとぶらぶら道を歩いていた夕暮れ時。鎮守の森のような公園を通り過ぎ、もうすぐ東急百貨店にさしかかると言う所で、向こうからばたばたと何人も警官が走って来た。どうしたのだろうと思っていると、その先には何台ものパトカーや消防車が停車し、ビニールテープが張りめぐらされ、警官たち、消防士たち、腕に新聞社やテレビ局の腕章をつけたマスコミ関係者たち、そして大勢の野次馬たちがたむろしていた。

一体なにごとだ。僕は即座に野次馬の一員となり、事の成り行きを見守ることにした。野次馬たちは、通りの角にある駐車場のフェンスの前に群がっていた。フェンスの向こうにはカメラや集音マイクを抱えた報道陣たちがおしくら饅頭を食べて、黄色のビニールテープで区切られたさらにその向こうの通りには消防士や救急隊員が右往左往していた。

「救急車が通りますんで、すみやかにどいてください！」救急隊員は拡声器で必死にそう怒鳴っているのだが、報道陣は救急車を通そうとする素振りなど見せず、むしろ救急車を撮影しようと雪崩をうって駆け寄り、道を塞ぐばかり。救急車はカメラと脚立と集音マイクに囲まれて、少しも動けない。一体なにごとだ。

野次馬たちはめいめい携帯電話を掲げ、救急車と報道陣の小競り合いを写真に収めていた。中には家に電話をかけ、「もしもし。ちょっと帰るの遅くなるから、ジョン（※犬の名前らしい）の散歩をよろしく」なんて会話をしている人もいる。しかし、いつまでたっても何が起きているのか、さっぱりわからない。

暫く経って救急車は、怪我人を乗せて引き返してきた。またぞろ、わらわらと報道陣が道を塞ぎ、集音マイクが祇園祭の幟のように天を突いた。「通ります！どいてください！」という電氣的に拡張された救急隊員の悲痛な叫び声が空しくこだました。『救急車は三人目の負傷者を運んでいくらしい』ということが周辺の人たちの話からわかった。救急車にむしゃぶりついてゆくビデオカメラの群れが、心底おぞましいものに見えた。

それから長い格闘を経て、ようやくと救急車は走り去った。それを見届けると、僕はポケットから携帯を取り出し、実家に電話をかけた。数回ベルがなった後、父親が出た。

そしてようやく、東急百貨店近くにある温泉施設が爆発事故を起こしたことがわかった。今さっきテレビで特番をやったよ、と父親。ああそうかい、実は今その現場のすぐ近くにいまするなんだ――

僕は電話を切り、再びそれをポケットに収納した。それにしても、現場から数百メートルも離れていない僕が、現場から数百キロは離れた場所にいるであろう父親から事故の状況を教えてもらうというのは、なんともおかしい話であるよな。

その時、不安定な脚立の上に立った小太りのアナウンサーに向かって、ひげ面のカメラマンがキューを出した。僕はそれを合図に回れ右をし、そして帰途に着いた。

寮に帰り食堂に顔を出すと、案の定爆発事件の話で持ちきりであった。僕は運ばれてきた飯をもそもぞと食いながら、寮生たちの話に耳を傾け、そして時たまテレビのニュースに目をやっていった。もちろん、テレビも爆発事件の話題で持ちきりだった。とうとう三人目の死者が出た、とキヤスターが言い、僕は思わずどきりとした。ひょっとして、僕が目にした救急車で運ばれていたのは、まさにその人だったのかもしれない。

事故の翌日から数ヶ月の間、温泉施設の入ったビルの表には黄色いビニールテープが張り巡らされ、見張りの警官が立つようになった。ビルの前の道路は僕の朝の散歩コースであるのだが、ぼくがどんなに早く起きた朝も、滝のような雨が降った朝も、そこを通りかかれば必ず警官が仁王立ちになっていた。そのうち、警官の横には献花や供物をするための台が設置され、通行人が思い思いに花束やジュースなどを供えるようになった。

散歩用のジャージに身を包んだ僕は、肩をすくめるようにして警官の前を通り過ぎた。その時ふと、台の上に鎮座ましまして、誰かが供えたコーヒー牛乳とフルーツ牛乳の瓶が目に見えついた。

確かに、あれらは銭湯には欠かせない飲み物なものな。

XXXXXXXXXX

さて。

これから、朝の散歩で見かけた猫の死体について（特に何の脈絡もなく）物語ろうと思う。かの高名な志賀直哉も、蜂だの鼠だのイモリだのの死体を組板にのせ、アレコレ文章を書いたものだ。その伝統を抛り所として、と言うか免罪符にして、と言うか言い訳にして、猫の死体について語ってみたい。

さて。

僕が猫の死体を見かけたのは、爆発事故から一週間ぐらい経ったある朝のことであった。

場所は、事故を起こした温泉施設が入っているビルから、ほんの数メートルしか離れていないところである。

猫は黒猫で、車に跳ねられたのが死因のようだった。死体には、ほとんど外傷というものがなかった。薄ら笑いたような口元から、一筋の血が垂れているだけであつた。僕はそれを見て、何故か薄ら寒いような気分になった。

不思議だつた。僕は、この猫の死体よりもっとグロテスクで残酷な死体を幾度となく見たことがある。僕は岡山の片田舎で生まれ育つたのだが、山沿いの田舎道に車に轢かれた動物の死体が転がっているのは日常茶飯事であつた。頭をかち割られて脳髓が露出した狸。腹部が裂けて大腸がはみ出したイタチ。何十台もの車に押し潰されるうち、もはや何の動物だったのかすら判然としなくなつてしまつた、毛皮つきの真つ赤な肉塊。しかし僕はそれらを見ても存外に平気であつた。はあ、狸が死んどるな。ほお、イタチが死んどるな。へえ、何かよくわからん奴が死んどるな。その程度の認識であつた。

しかしどうだろう、かように心臓の強いはずの僕が、一片の臓器も露出させることなく「きれいな」状態で死んでいる黒猫にびびらされているのである。

動かない黒猫は一個の物体であつた。生き物はどんなものでも死を迎え、死を迎えれば物体と化す、というのは何百回も聞かされた**新鮮味のない**言説だが、僕はなぜか**新鮮な**違和感とともに猫を見ていた。なんて「物体らしい物体」なのだろう！と僕は密かに感嘆していたのである。日常生活において、僕がうんざりするほどよく接している数多くの「ただの物体」——鉛筆／消しゴム／リモコン／パソコン／醤油差し／洗濯機／電池／時計／その他いろいろ——そういった馴染み深い「ただの物体」のどれよりもその死体は「物体」らしく見えたのである。唐突に「物体」があらゆる事象から己を切り離してしまい、「物体」としての存在感を僕にアップビールしている、そんな雰囲気がつた。

しかし、最も僕の心を捉えたのは、その猫の死に顔、薄ら笑いを浮かべたような口元の曲線であつた。これを見て、まず思い出したのは宮沢賢治である。彼の童話の登場人（動）物たちの多くが、その最期には笑顔を浮かべて死ぬのである。そして、そのシーンが——こういうことを書くとき、数多くいらつしやる宮沢賢治信奉者の方々から反発を食らうかもしれないが——なんとも恐ろしいのである。しかし恐ろしいと言つてもその感情は薄気味悪さや不気味さなどのオカルティックな反応に由来するものではなく、ある種の「畏怖」のようなものと似通っているのである。こと、『土神ときつね』や『ひかりの素足』といった作品は、非常に哀しく読後には思わず涙してしまふこと請け合ひの名作なのだが、それでも僕は涙する一方で、主人公たちの浮かべた幸せな死に顔から、生と死の間に横たわる形容不能の恐ろしさを感じたものである。しかし——とりあえず「死に顔＝微笑」ということで宮沢賢治を思い起こしたのだが、この猫の浮かべている間抜けな笑顔は、どうもそれとは趣を異にするものであるように思えてきた。確かにその微笑からは、ある種の宗教的崇高さのようなものの一片が感じられはしたもの、それよりももっと下世話で、人を小馬鹿にしたような表情だったのである。そこで思い出したのが『不思議の国のアリス』にも出てくる妖怪「チェシャ猫」である。

チェシャ猫は、いつも薄ら笑いを絶やさない猫のばけものである。なるほど、改めて考えてみれば、猫というものは本来さして笑顔を見せない動物であり、その猫が常に笑っているというのは、それだけで十二分に不気味であるのだ。

ボルヘスの著した『幻獣辞典』によれば、チェシャ猫の由来は諸説あるようである。その昔、チェシヤ州で歯をむき出しにしている猫の顔をかたどつたチーズが売られており、これが起源で

あるという説（……とりあえず、そのチーズがあまり食欲をそそる商品でなかったことだけは確かだ）。その昔チェシヤ州は伯爵領であり、その地の猫たちは自分たちが高貴な土地の生まれだということ、いつも得意げな笑顔を浮かべはしゃいでいたという説（……なんという通俗的な猫どもであろうか！）。他にも色々解釈がある。しかし結局のところ、どの由来が正しいのかは判然としない。当然だろう、チェシヤ猫自体が判然としない存在なのだから。

『不思議の国のアリス』に出てくるチェシヤ猫は、ゆつくりと姿を消し、しかし姿を消した後もお——もちろん、顔も、口も、歯も消え去ってなお——薄ら笑いだけをそこへ残していく。

この黒猫も、まさにそうであつた。翌日早朝、僕がまたぞろその路地を通りかかった時、とうに死体は撤去されていたのだが、**あの薄ら笑いだけは残っていたのである**。薄ら笑いは質感を伴わない存在感でもって、渋谷の一角を歪めていた。何と気色の悪いことであろうか、いつもと変わらぬ日常が戻っているかと思えば、薄ら笑いだけが空気の底に沈殿しているのだから！

僕が思わず嫌な顔をしていると、ビルの下で見張り番をしている警官と偶然に目が合った。警官は僕の表情を自分に向けてのものだと解釈してしまったようで、僕を鬱陶しそうな眼で睨み返してきた。おまわりさん、それは誤解だ、誤解なんだよ。

×××××

と、おまわりさんの登場で幕を下ろしたかに見える猫の話には、実は続きがある。

それから一週間ほど経つと、さすがの薄ら笑いも文字通り薄れてゆき、ついにはなくなつてしまった。僕はすっかり安心して、また単調で平穏な散策の日々を送っていたのだが、ある土曜日の蒸し暑い夜に、またぞろあの薄ら笑いと出会ってしまった。

それは東急百貨店前の交差点であつた。僕はいつものように散歩の最中、白い無地のＴシャツと破れたジャージの下という渋谷に似つかわしくないファッションでたらたらと前進していたのだつた。朝晩の散歩を始めてから、一ヶ月ちよつとが経過していた。なんとなく、腰周りの余計な肉は減つたようにも感じていた。しかしどうなんだろう、俺は本当に痩せられるのかしらん。

僕はぼんやりとした不安を抱きつつ、ショーウィンドーに映つた自分の不恰好なシルエットを眺めていた。

と、その時、ショーウィンドーに不吉なものが映っていることに気づいた。そは何ぞ？我が醜い肉体なりや？それもある、しかしそれ以外にもう一つあるのだ。そは何ぞ？それは——薄ら笑いを浮かべた女の姿である。

僕は思わず振り返つた。僕の視線はすぐに女を捕らえた。女は着物のような毛皮のような気色の悪い衣装を身にまとい、僕の真横に佇んでいた。不自然に背中を丸めた彼女の顔はよく見ると毛で覆われており、目は黄色く光を放ち、唇の間からは鋭い歯と真っ赤な舌が見えた。そして、薄ら笑いを浮かべた口元からは、一筋の紅が滴っていた。

「久しぶりね」

女は軽く握った拳を僕の肩に置き、そう話しかけてきた。生ぐさい吐息が僕の鼻にかかった。僕は若干の気色悪さを覚えつつ、「何？あの時の猫？」と尋ねた。

女は「ピンポン」と言うなり後ろを向いた。僕の目の前に、巨大な猫の尻尾が突き出された。しかも、その尻尾は二本に枝分かれしていた。猫又だ、こいつとうとう、猫又になりやがった。

僕は顔をしかめた。黒猫の猫又は一番たちが悪いと聞く。つくづく俺は、運の悪い男だ。

「なんの用ですか」

「アラ、ずいぶんつれないんじゃない。」猫又は、神経を逆なでするような猫なで声で拗ねて見せた。「馴染みの仲じゃない」

「俺は貴女と馴染んだ覚えはありませんが」

「またそんなこと言つてエ」と猫又はすると日本の尻尾をしまいながら言う。「あんた、私の死んだ場所に毎日通（かよ）つてたじゃない。もうすっかり、馴染みの仲よ。」と、わけのわからぬことをぬかす。化け物の論理にはついていけない。

「通（かよ）つていたのではなくて、通（とお）つていただけです」と僕。「それで、なんか用でもあるんですか？」

「何よ、喧嘩腰ねエ」と猫又は膨れっ面をする。「散歩好きなあんたに、ちょっと面白いコースを教えてあげようと思っただけよ。」

あんた、毎日この辺り散歩してるでしょ。でも、いつまでも地上にへばりついて、同じ所をぐるぐる回つても退屈でしょ。だから今夜は特別に、人間どもは普通通れない、不思議な散歩道を案内するわよ。ついで」

猫又は、軽く握つた両の手の拳を顔の前で揺らしながら、喉を鳴らした。そしてくると踵を返すと、背後に聳え立つ東急百貨店の建物に駆け寄り、その壁をすると登り始めた。猫又は登りながら、「あんたにも術をかけたから大丈夫！さつさと登つといいで」と僕に向かって叫んだ。すると、考える間もなく僕の肢体が奇妙なリズムを伴つて踊りだし、あれよあれよと言う間に僕は東急百貨店の壁に吸い寄せられていた。まるで猫のような動きだ——僕は僕のことを離れて活動続ける我が手足を驚嘆のまなざしで見つめながら、そう呟いた。土曜日の街は、サカリのついた若者たちが押し合いへし合いを繰り返し、息苦しいほどだった。僕は猫又の後に続いて、すると東急百貨店の壁面をよじ登って行つた。不思議と、恐ろしさは感じなかった。ただ、**ど**
んどん地面が遠くなつていく感覚だけを感じていた。

それから僕と猫又は、毒々しい電飾看板の間をすり抜け、はるか足の下に米粒のような人間たちがひしめいているのを眺めながら、空中散歩を楽しんだ。我々はビルからビルへと飛び移り、飛び移り、飛び移り、上機嫌で歩みを進めた。時折、天に向かって吼えもした。爽快だった。

その爽快さ加減をもっと詳しく描写したいのだが、僕の貧弱なボキャブラリーではどうても無理な話だ。いや、それ以前に、人語ごときで表現できるものなど、たかが知れているのである。

やがて終電が出る頃になると、潮が引くように通りからは人が消えていった。そして、まるで「パチン」と蛍光灯のスイッチを切ってしまったかのごとく、渋谷の街は停止してしまった。そんな静寂の世界を、僕と猫又はどこまでも飛び回るのだった。

××××××

朝が来た。僕と猫又は朝の冷気を肌を感じながら、するすると地面に降りていった。猫又は黒猫の姿に戻り——しかし、尻尾は相変わらず二股に分かれていた——薄ら笑いを浮かべたままで何処かへ走り去って行つた。きっと、この街の雑踏には何百、何千匹という化け猫どもがひしめ

き合っているのだろう。僕はそう思った。

僕は猫又の後姿を見送ると、その場にてんと横たわった。心地よい疲労感と眠気が、体の中に沈殿していた。考えてみれば夜通し歩いていたのも、そりゃあ疲れるさ。僕は頬にひんやりとしたコンクリートの肌触りを感じながら、静かに呼吸をしていた。かすかに、とんこつラーメンの香りが漂ってくるのを感じた。ははあ、ここは二十四時間営業の本格派ラーメン屋の前なのだな、と僕は考えた。朝の光に照らされた歩道の上で、僕はゆっくりと眠りに落ちつつあった。

ふと人の気配を感じたので、薄目を開けて様子を窺った。傍らにシルクハットに燕尾服の紳士が立っていて、困惑した表情で僕を覗き込んでいた。どうやら僕に寝場所を占拠されたので、途方にくれているらしかった。

僕は若干の申し訳なさを感じつつ、再び目を閉じて眠りの体勢に入って行った。なにしろ彼は紳士なのだから、きっと僕の非礼も見逃してくれるに違いない。

ヒア・カムズ・ザ・フラッド——箱舟をめぐる対話

国境近くの荒れ果てた山村で、ひとりの両性具有の青年が大工仕事に精を出している。仮に、この人物をAとしておこう。Aはヘドロのついた木材を鋸で切断し、かんなをかけ、断片と化したそれらを釘で打ちつけている。短くイキを吐きながら、Aはその作業に没頭している。青味がかった美しい横顔が、近隣を流れる川から吹いてくる風を受け止めている。時おりAは仕事の手を止め、空に向かって身体を伸ばしてみる。カモシカのような脚、澄んだ瞳。全体としては、すぐに骨が折れてしまいそうなほど華奢な体つきなのだが、力の要る仕事を続けているせいかな、両腕だけはたくましくなっている。

そこに、一人の老人がやって来る。仮に、彼をBとしておこう。白いものの混じる髪を肩まで伸ばし、かつ、白いものの混じる髭を胸まで伸ばしている。そして、彫刻刀で彫ったような深い皺が顔一面に刻み込まれている。節だらけの手は杖代わりの柏の枝を強く握りしめており、彼の眼はしょぼつきながらもまっすぐ前方を見つめている。大きく曲がった腰をとんとんと叩きながら、彼はゆつくりと歩みを進めている。川から風が吹いてきて、彼の髪と髭が微かに揺れている。

Bは歩みを止める。彼は自分の眼前で黙々と作業を続けるAを所在なさげに見やる。しかしその所在なさげな所作の裏側には、何がしかの好奇心らしきものも垣間見えている。Bはポケットから小型のトランジスタラジオを取り出し、ひしゃげた自分の耳に押し当てる。が、残念ながら何も聞こえない。Aの道具箱の上には、旧式の大きなラジオが乗せられているが、これも黙ったままで何一つ伝えようとしていない。そのアンテナは長く伸びて天を突いているというのに。いつの間にか、地球上にある放送局のすべてが、空に向かって電波を飛ばすのをやめてしまったのだろうか。

Bは肩をすくめ、ラジオをポケットにしまう。そして咳払いをひとつして、こう尋ねる。「何を作っているのですか」

「箱舟です」Aは青味がかった顔に微笑みを浮かべて言う。

「ほう」とB。「なぜ、そんなものをお作りになつているのですか？」

「洪水が来るからですよ」Aは再び鋸を手に取り、木材を切断し始める。「もうすぐ、何もかも流されてしまうでしょう。だから、箱舟でみんなを救うのです。」

「なるほど」Bは大きくうなずく「では、あなたはキチガイかアホかのいずれかですね」

「両方ともですよ」Aは青味がかった顔に微笑を浮かべて言う。

「今日の洪水、箱舟なんかじゃどうにもなりませんよ」とB。

「そうですね」Aはタオルを取り、瘦せた乳房に浮かんだ汗をぬぐう。「まったくその通りです」黙々と作業を続けるAの横へ、Bはどっかりと座り込む。そして、Bはポケットから萎びた葡萄パンを取り出し、少しずつ齧り始める。しばらくそのまま、両者は無言のまま。

ふと、Bは気まぐれを起こしたような顔をして、パンをAに向かって突き出してみる。

「一口どうです？」

「ありがたい。でも結構です」

「そんな重労働をなさってるのだから、食べなきゃもたんでしょう」

「ありがとうございます。でも私は、そんなに食べられる体質ではないのです」Aは自分の痩せ

た肋骨を撫でさすりながら、微笑んで言う。Bはフンと鼻を鳴らし、またぞろ葡萄パンを齧り始める。Aは箱舟の中に、古くさい大きな電話を取り付けた。もはや、この箱舟が出向した時には不要なはずのその機械を、彼は丁寧に取り付けるのだった。

その時、川の支流を、何か巨大な球形のものがゆっくりと横切ってゆくのが見えた。それは「もじゃもじゃ」という擬音を視覚化したような緑色の剛毛を全身に生やしていて、その頭は蛇だった。葡萄パンを食べる手を止め、ポカンとした顔でその摩訶不思議な生物を眺めているBに向かって、Aが説明する。

「あれはこの川に時々現れる動物なんです。奇妙な生き物でしょう？」

「恐らく、『毛むくじやら獣』と呼ばれる動物の子孫だと思われます」Bは感心したような声で言った。「書物で読んだことはありますが、実物を見るのは初めてです。」

最も有名な『毛むくじやら獣』が出現したのは、中世フランスのフェルテ・ベルナール地方です。この地方を流れるユイヌ川が、その奇妙な動物の棲家でした。

『毛むくじやら獣』は蛇の頭と、全身を覆う毒針と、亀の脚に似た幅広い蹄と、巨大な尾を持つていました。獣は炎を吐いて畑の作物を枯らしたり、尾を振り回して人間や家畜をなぶり殺したり、散々悪事を働いていました。農夫は幾度となくこの獣を捕らえようとはしましたが、すぐにそれは追っ手を逃れてユイヌ川に隠れ、そして何万マイルにもわたる洪水を引き起こすのでした。

『毛むくじやら獣』は特に、無垢な乙女や子供を惨殺することを好みました。ある日、獣は純潔の処女を八つ裂きにし、血にまみれ変わり果てたその死体を川床に引きずり込んでしまいました。その処女の恋人はこの悲劇を嘆き悲しみ、そして怒り狂い、獣の跡を追いました。そして、刀で、その尾を切り裂きました。そう、『毛むくじやら獣』のただ一つの弱点は、その巨大な尾だったのです。こうして獣は倒され、死骸はミイラにされ、村中の人間が怪物の死を祝って盛大な祭りを催したということです。」

「なるほど、そんな動物だったのですが。知りませんでした」Aは穏やかな微笑を浮かべて言う。

「しかしその怪物は、幸福な時代の物語ですね」

「まったくその通りです」とB。「なにしろ、神の怒りが生んだ大洪水をも生き延びた超獣が、愛の力を宿した青年の一刀によっていとも簡単に征伐されてしまうんですからね」

「でも、その『毛むくじやら獣』も、今度来る大洪水には、さすがに成すすべもないでしょうね」

「ええ。そして、神の怒りをも凌ぐという愛の力すらも、成すすべがないでしょう——いや、そもそも、もはや愛の力などというものが今も存在しているのか、怪しいものですが」

Aは笑って、鋸を使っている。傍らのラジオから伸びているアンテナは手持ち無沙汰な様子で、なんとかして虚空に散らばっている電波を拾い集めようと試みているらしいのだが、果たせない。

「どんな洪水が来るんでしょうね」首筋に光る汗の粒をぬぐいながら、Aが問う。

「ひよっとして来ないかもしれませんよ」あご髭に付いたパン屑を払い落としながら、Bが答える。

「そうかもしれませんね」とA。「あるいは本当に洪水が来たとしても、それは我々が予想しているのとはちがう何かなのかもしれない」

「かもしれませんね」とB。

「もしくは、ひよっとすると、洪水はもうすでにやって来ているのかもしれない」とA。「気づかない間に、凍てつくような水がゆっくりと我々を蝕んでいるのかもしれない」。

——ねえ、時々漠然と考えることがあるんですよ。私たちはみんな、もうずっと昔に溺れ死んでしまったのかもしれない、と。」

「かもしれませんね——」とBは答え、葡萄パンの最後のひとかけらを口に放り込む。

「もしそうならば、この箱舟もどくの坊ですね。」美しい横顔を青く染めながら、Aが言う。

「でも箱舟を作ることはいいいことです。」とB。「私は最初、あなたをキチガイとかアホとか言いましたが、あれは罵倒ではない。むしろ屈折した賛辞のヴァリエーションと言ってもいい。あなたがうらやましいです、私は。なにしろ私は、箱舟を作ろうとすらしていませんからね。」

Bは曲がった腰をぐっと伸ばして、話を続けた。

「どうせ死ぬのに、どう生きるべきなのか。私はその答えが知りたくてたまりませんでした。

私はかつて病弱で醜い、孤独な子供でした。親も村人たちも私を忌み嫌い、私を村落から追い出してしまったのですが、私にとってそれはある意味で幸運なことでした。どう考えても私は長く生きていけそうもありませんでしたし、それならば外の世界に触れて見識を高め、何故自分がここにいて、生きていかなければならないのか、そして、どう生きるべきなのかという問題についての答えを探しに行こう、私はそう考えたのです。

そして私は街から街へと歩き続けました。街の酒場では、多くの人に出会いました。学者、職工、役人、娼婦、詐欺師、詩人、他にもいろいろ。彼らと語り合うことはとても刺激的で——時に意見が衝突し、後味の悪い思いをすることもありましたが——、その対話を通じ私は多くのヒントを得ることが出来ました。

また、私は酒場のみならず、図書館も大好きでした。古びたインクの匂いと羊皮紙の手触り、そして来館者の靴の音の響き、そういったものにどっぷりと浸って午後を過ごすことはこの上ない喜びでした。私は数千冊、数万冊の本に目を通しました。数え切れぬほどの偉大な先人たちが、これだけ大量の紙にさまざまなことを書きつけたのだから、いつか全てが氷解してしまうような一文に辿り着くことが出来るだろう、私はそう信じてページを捲り続けたのです。

——しかし不思議なことに、そうして多くのヒントを得ても、いつまで経っても何ひとつわからないのです。見識を高めれば高めるほど、何かについて知れば知るほど、なにもわからなくなるのです。

私は苦悩しました。私の勉強の仕方は間違っているのだろうか？そこで、私は人と話すのも本を読むのもやめ、外界と自分を切り離してもみました——しかし、当たり前ですが、そんな試みをして問題は何一つ片付きませんでした。学ばないままでもいい、知らないままでもいい、やはり何一つわかりやしないのです。

仕舞いには、『わかる』ということそれ自体が、一体どういうことなのかすらも、全然わからなくなってしまういました。」Bは苦笑いをして、肩をすくめる。「気づいてみたら、こんなに年をとってしまいました。しかし未だ、私は何一つわかっていない阿呆なのです」

「私もそうです。」とA。「私もなにひとつわからない。自分の心一つ、自分の体一つですら、よくわからないのです。だから私は、もう何もわからうともせず、ひたすら箱舟を作るのですよ。本当に洪水が来るのか、箱舟で何が救えるのか、そうした問いは、私には答えられません。いや、誰も答えを出せないでしょう——しかし私は、もはや何の意味性も失ってしまった箱舟作りに、命を削っているのです」

「それが最良の策でしょう」Bはそう言って、目を閉じる。

次にその目を開いた時には、『毛むくじゃら獣』は宵闇の中に溶け込みつつあった。Bは空を見上げる。透けるような、きれいな夕暮れだ。もうすぐ、洪水が来るだろう。そして、何もかもが無に帰すだろう。まるで、明け方に見る不安な夢が、半分覚醒した目に映る朝の光に溶け込んでゆくように――。

『毛むくじゃら獣』が彼らの視界から完全に消え去ると、Bは立ち上がった。「さて、私はもう行かなければならない」

そしてBは川べりまで歩いてゆき、その水を手のひらで掬い上げる。そしてその手を、まるで葡萄酒の満たされた碗を掲げるような仕草で高く挙げ、大工仕事を続ける青年に敬意を表して言う。

「あなたの箱舟が、我々の最高の墓標になることを祈って――」

Aは微笑んで、会釈を返す。

Aの視界から、Bの小さな後姿が遠ざかってゆく。

――国境近くの荒れ果てた山村で、ひとりの人間が大工仕事に精を出している。

ESCHATON

僕は歩いていた。

いや、あるいは、僕は空を飛んでいたのかもしれない。

もしくは、海を漂っていたのかもしれない。

その進行方向が前だったのか、後ろだったのか、それもわからない。

それ以前に、僕は動いてすらもいなかったのかもしれない。

どこを歩いているのかも、判然としなかった。

ただ、僕は歩いていた。

×××××

僕はたった一度だけ、きみとささやかな約束をしたことがある。

それは少年時代のことだった。僕ときみは、アイスクリーム屋の前にいた。

夏の空はどこまでも抜けるように痛々しく、湿気を含んだ暑い風を感じながら食べるアイスクリームは心地よかった。

そして、僕はきみと約束を交わしたのだった。

それが何の約束だったのか、僕はもう忘れてしまった。

あの日の空の色、風のおい、そしてきみがかぶっていた麦藁帽子のことも覚えているというのに。

僕はその約束を果たすつもりでいた。その頃の僕は、何だってやり遂げられると思っていたから。

冷たいアイスクリームをなめながら。

×××××

でも僕は約束を果たせずじまいだった。

僕はきみが幸せになるのを見届ける前に、一人で街を出て行ってしまったのだ。

僕は靴すらも履かないで、旅回りのサーカス一座を追って街を出た。

僕にも信じていたものがあつた。

それは、アイスクリームをなめながら、きつと叶えられるはずだった。

でも、僕は約束を果たす前に、街を出てしまった。

×××××

目が覚めたのは、捕虜收容キャンプでだった。僕は乱暴に後頭部を蹴飛ばされ、無理やり起こされたのだった。僕を蹴飛ばしたのは髭面の将校で、彼は鐘が割れるような声で言った。「起きろ！いつまで寝てるんだ！」

僕は事態を把握できないまま、将校の髭面を眺めていた。ただ、ずいぶん長い眠りだったことだけはわかった。

「さっさと起きて、ここから出て行け！戦争はもう終わった、お前は解放されたんだよ」

俺が寝ている間に戦争があったのか？あるいは、戦場で傷を負ったから、俺は眠り続けていたのだろうか——。僕はのろのろと起き上がり、くしゃくしゃと頭を搔いた。

「早くしろ！今すぐ、お前に支給した枕と毛布を回収する！」

そう言っただけで僕はベッドから叩き落とし、乱暴な手つきで寝具を片付け始めた。ほこりだらけ、くすんだ光に包まれた僕は痛む背骨をさすり、立ち上がった。

捕虜はみんな惚けたような顔つきでキャンプを出て行った。あの将校も、制服をずたずたに引き裂き、あろうことか髭まで剃って、どこかへ歩き去っていった。僕をはじめとして、解放された捕虜たちは戸惑っていた。キャンプの外には、見渡す限り何もなかったのだ。

やがて、僕たちはちりぢりばらになっただけで、そこを立ち去った。

××××××

そして僕は歩き続けた。

いや、あるいは、僕は空を飛んでいたのかもしれない。

もしくは——？

××××××

——この星はあと少しで爆発するんだ。

そんな他愛もない空想をしながら、僕は歩き続けた。

どこまでも砂漠が続いていた。

星空は、砂漠から見るのが一番美しいと思った。

誰かといっしょに見たくなるほど、美しい星空だった。

××××××

僕のポケットには、短波無線が入っていた。

おそらく、戦争の最中に——僕はその時の記憶がないのだけれども——使っていたものだろう。

僕はそれを使って、懐かしい友達たちと雑音交じりのおしゃべりを楽しんだ。サーカス一座で知り合った、愉快なやつらだ。綱渡りの最中に落ちて死んだ奴、空中ブランコから落ちて死んだ奴、肥満すぎて死んだ百貫デブ、感染症で死んだ刺青男、野垂れ死んだ空気女、怪力男に絞め殺されたお調子者のピエロ、手首を切って自殺した怪力男、みんないい奴だった。僕は彼らと夜

を徹して語り合った。誰かといっしよに見たくなるような、美しい星空の下で。

さよならを告げて無線を切り、僕は目を閉じた。さて、俺自身はいつ死んだのだろうか。そして僕は無線をこわした。

×××××

僕は目を開けた。

朝の光が辺りを満たし、誰かのシルエットが逆行線に揺れていた。あれは誰のシルエットだろう。きみなのだろうか。

いや、あれはきつと、きみ以外の人類全員の集積なのだろう。それは朝の光に包まれていた。

果たしてそれは、作りかけの箱舟だった。

箱舟は、その船体の半分を砂に埋めていた。

僕はその箱舟にもたれて座り込んだ。傍らには、旧式のラジオが落ちていた。ダイヤルを回しても、雑音すら聞こえてこない。ただ、天に向かってアンテナを伸ばしているだけだった。

×××××

箱舟にもたれて有明の月を眺めているうち、僕は誰かの声を聞きたくなった。

しかし、僕はすでに短波無線をこわしてしまっていた。

ラジオも黙ったままだった。

僕は身を起こし、箱舟の中を見てみた。

電話回線の切断された、古い大きな電話が置き去られていた。

僕は受話器をとった。

「もしもし」と僕。

「もしもし、私。元気？」ときみ。

「全然」僕は肩をすくめる。

「でしょうね。」きみは笑っている。

「今はどこに住んでるの？」

「とおい所」

「幸せ？」

「なんでしょうね」

「よかった」と僕。

「よかったわ。あなたは何処に？」

「アイスクリーム屋の前さ。」僕は振り返って、アイスクリーム屋の看板に触れた。
「ずっと待ち続けているんだ。」

誰も来るはずもないって、わかっているのに待ち続けているんだ。」

受話器の向こうで、きみが頷いたのを感じた。

「いつか、すべての約束が裏切られて、この宇宙が破滅してしまったら、その時はきっと会いに行くよ」

——その時まで、さようなら。

僕は受話器を置いた。

枯葉 *Epilogue*

街路を落葉が彩っていた。雨はほんの一時間ほど前に止んで、雲の切れ間から顔をのぞかせた太陽はくすんだオレンジ色だった。雨にぬれた落葉はつるつると滑りやすくて、底のすり減った靴を履いている僕はその感触に辟易していた。それよりも心配なのは傍らを歩いているココナで、彼女は買ったばかりのまだ履きなれていないブーツで軽やかに歩いているのだった。

「気をつけないと転ぶよ」

「転ばないよ」とココナ。

結局転んだのは僕だった。僕は鈍痛と、水にぬれた布地が肌に張りついた時のなんとも言えない情けなさを、貧相な大腿部に覚えながら起き上がった。

「大丈夫？」とココナ。

「まあね」と僕。本当はそんなに大丈夫でもないのだが。

いつの間にか肌寒い季節となり、吹いてくる風は火照る頬に心地よかった。ああまたこうして時が流れてしまうのだ、僕は柄にも無く感傷的になりつつそう思った。それは、雪のように舞い降りてきては街路を覆い尽くしている、色とりどりの枯葉のせいかもしれない。最も、それらのせいで僕は先刻無様に転倒していたのだから、感傷もへったくれもないのかもしれないが。ただ一つ言えることは、その雨水によって湿った葉っぱの絨毯が、この古ぼけたレンガ道にとってもよく似合っていたと言うこと。

「秋も深まってきたね」とココナ。

「まったくだ」

「気づいた時には、もう冬だよ」

「せわしないことを言うね」僕は苦笑いした。しかし、確かに冬は着実に近づきつつあった。

ココナはぐるぐるとマフラーを巻き直した。それは、彼女が去年一冬かかって編み上げた、クリーム色のマフラーである。冬はあまりにも早く通り過ぎてしまったので、彼女がそれを編み終わる頃にはもう暖かな春が来ていた。それから夏が来て、秋が来て、今では再びマフラーの季節である。「何もかもがあんまりにも早く通り過ぎてしまうね」とココナは言った。「どうせ何も変わりやしないし、同じところをぐるぐる回っているだけなのに」空気の寒さのせいで僕らは自然と歩くスピードが早まり、見慣れたレンガ道をリズムカールに散策してゆくのがあった。僕は、Yellow Bric Roadというタイトルを思い起こした。ただし、それはエルトン・ジョンの歌の方ではなく、キャプテン・ビーフハートの方である（同題異曲があるのである）。黄色いレンガ道、と僕は呟いてみた。しかし黄色いのはレンガではなかった。レンガは茶色だった。その上にもった落葉は黄色と言えなくもなかった。Yellow Bric Road、僕は呟いてみる。あの歌を聴いていたのはいつだったけな。とにかく、感傷的になるのに十分なほど昔のことだったような気がする。

ビルの立ち並ぶ街路を通り抜けて、僕たちは一本の橋に差しかった。橋の下を流れているのは、稲刈川。ここ稲刈市を貫く、巨きな河川だ。

僕たちは欄干から身を乗り出し、流れてゆく水の変化を観察した。それにしても、水というものは眺めていて飽きることがない。一秒たりとも同じ顔を見せず、絶えず変わってゆく。僕はそれに、一種独特ないとおしさを感じもする。

「絵をばら撒いたというのは、この橋の上からなの？」僕は、傍らで水を眺めているココナに訪ねた。ココナはこくりと頷いた。

先日、ココナはこの橋の上でスケッチをしていた。足の下を流れてゆく川と、頭の上に広がっている空とが溶け合う地点に魅力を感じて、同じような風景画を何百枚も描いたのだという。半日かけて、彼女はその仕事を続けた。空が夕焼け色に染まってから、やっと筆を置いた。

ココナは立ち上がった。そして——なぜそんなことをしたのか、自分でもよくわからないらしいのだが——手に持っていた絵の束を、橋の上からばら撒いたのだった。何百枚という紙切れが空中に躍り上がり、燃え上がるような夕日の色に染め上げられた。すぐにそれらは重力に引かれて川に落ち、水面を覆いつくした。色鉛筆で写し取られたこの街の小さな風景が、いくつもいくつも、オレンジの光に照らされながら、ゆっくりと海に向かって流れてゆく。ココナはそれを長い間眺めた後で、帰途についたのだった。

「それはそれはキレイだった」とココナは感想を述べていた。

橋からは「おばけ煙突」と呼ばれている三本の煙突が見える。しかしこの煙突、本当は四本なのだ。なんでも、その四本の煙突のうちの二本が、この橋から見てちょうど一直線上に並んでいるために一本に見え、がために合計三本に見えてしまうのだという。ちなみに、場所によつては四本が二本に見え、はなはだしきにいたつては四本が一本に見える場所もあるという話だ。なるほど、科学的な説明が可能とは言え、やっぱり「おばけ煙突」と呼ぶにふさわしい摩訶不思議な煙突である。

橋の下には浮浪者だろうか、薄汚い格好をした若者が三人たむろしている。一人が笛を吹き、一人がパーカッションの代わりに放置自転車を棒で叩いて音を出している。そしてもう一人は歌とも語りともつかない気色の悪い節回しで何かを朗詠している。そんな彼らの周りを、仔ヤギのような小さな動物が元氣よく跳ね回っている。それは何とも言えず物悲しく、シュルレアリスティックな光景だった。あの三人と一匹は何なのだろう。僕の人生と彼らの人生は今始めて小さな接触を生じ、そしてすぐにまたそれぞれの日常に帰って行ってしまうのだろうか（第一彼らの方は演奏に夢中で、僕の存在に気づきすらしていない）、それがとても奇妙なことと思えた、なぜだか。

橋の上、せわしなく行き交う人々の足音に埋もれて、一人の薄汚れたストリートミュージシャンが座り込んでいた。彼はアコギを抱え、怪しげな手つきで弦をいじくりながら、鼻歌ともスキヤットともつかない奇妙な呟きを漏らしていた。彼の足元には飲みかけのカップ酒が置いてあり、その中には晩秋の街を吹く風が沈殿していた。

「やっと雨がやんだね」

彼は、目の前を通りかかった僕とココナに向かってそう言った。いや、それは別に僕らに向けられた言葉でもなんでもなくて、単なる独り言だったのかもしれない。しかし、僕はそれを受け止め、答えを發した。

「ええ、やみましたね」

ミュージシャンは静かにうなずいた。そして、アコギをいじくる手を止めて言った。

「今日は、おぼけ煙突は見えているかい？」

「ええ、いつも通りに三本見えてますよ」

彼は首をひねり、僕が指し示した方向に顔を向けた。「ああほんとだ、見える見える」しかし再びアコギに手をやり、「でもそのうち、三本が二本に、二本が一本になり、そしてしまいには**一本も見えなくなるんだろぅね**。なにしろこれから冬が来て、それはそれは寒くなるんだから」そして彼は肩をすくめた。「もう僕も若くないもんでね。寒空に向かって伸びる、古びた煙突の気分共感を覚えるよ」

僕とココナは顔を見合わせた。

ミュージシャンはギターを滑らかにストロークして、「さてと。何か歌でも聴いてくかい？」

僕とココナはうなずいて、彼の前にしゃがみこんだ（橋の路面はまだ水びたしだったので、少し腰を浮かせるようにして）。彼はマイナーコードの静かな曲を歌った。本当にそれは静かな曲だったので、ともすれば人々の喧騒と風の音にかき消されて空に拡散してしまいそうだった。しかし幸運なことに、彼が揺らした空気はちゃんと僕とココナの耳に届いた。その曲は古いフォークソングで、初めて聞く曲のようでもあり、また同時に、今まで何百回となく聴いてきた曲のようでもあった。おそらくは、ずっと昔に耳にしたことのある歌なのだろう。何はともあれ、俺はあまりにも多くの歌を忘れてしまったのだな、僕はそんなことを考えていた。

彼が歌い終わると、僕とココナは拍手をした。ミュージシャンはカップ酒を一口口に含むと、チューニングをしながら「なんだか興が乗ってきたんで、もう一曲やるよ」と言った。

僕とココナは拍手をした。

「しかし何の曲をやるのかな」と彼。「リクエストはある？」

しかし僕とココナは何も思いつかなかった。思いつかなかったのは彼も同じだった。しばらく三人寄って文殊の知恵で考えたのだが、仕舞いに彼は「よしわかった。俺が大昔に書いた歌を、久しぶりに歌ってみるよ」と言って、再びギターを弾き始めた。

みんな帰った雨上がりの学校通りにひとり

街へすいこまれてったきみの影を探して歩いてる

またぞろ泣き出しそうな空 たれこめた雲とにらめっこ

誰かが投げたボールひとつ 眠たげに横切ってた

何気無くて宙ぶらりんのぼくは石蹴りあそび

窓から切り取ったようなフシギなひとときのなかで

Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you want me.

Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you need me.

ふりかえった くすんだビルで夕陽隠れてた
知らない間に ホーキ乗ったマホウ使いが月を食べた
さびしさをまぎらわすために犬が鳴いている
おわりそうぞつづいていく 哀しいほつれたつづれおり

どこにもありやしない星くずの国を夢見ながら
カフェオレのなかで誰かのポエムを拾ってる

*Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you want me.
Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you need me.*

(間奏)

なんとなく くるおしく そして退屈なぼくたち
チェシヤ猫に笑われた気がして フト天をあおいだ

*Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you want me.
Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you need me.
Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you want me.
Dobi-Dobi-Dobanba-Dobi-Do-Ban, Can you need me.*

~~~~~

川は、空と溶け合う地点まで流れてゆき、そして海に溶け込んでゆく。川岸に植えられた並木から舞い落ちた幾千枚という枯葉が、稲刈川の水面を漂っている。川は雨のせいで増水したとは言え、依然として穏やかな流れを保っている。もうすぐ沈もうとしている夕陽——近頃、夕陽はいつそう早くに沈んでしまうようになった——が、その枯葉と水面とを照らしている。枯葉と水面はその光を反射し、反射した光は僕とココナの佇んでいる端の上にまで届いた。ちょうどこんな風景だったのかい、絵をばら撒いたあの日の夕暮れは、僕はココナにそう尋ねる。うん、ちょうどこんな風景だったよ、とココナは答える。

あの枯葉一枚一枚には、僕たちの知らない何千もの物語が描かれている。それは夕陽に彩られながら、ゆつくりと海に溶けこんでゆくのだ。



## 跋文

本作品は、十代最後の数ヶ月間で書かれた小品をまとめた短編集である。

別だん「創作によって自分の十代を総括してやろう」などという大それた意図もなく、二十歳になる記念に小説集の一つでも書いておくか、という程度の思いつきの産物だ。

ところで、カート・ヴォネガットが、自著である『屠殺場五号』と『チャンピオンたちの朝食』の二作について、『屠殺場五号』と『チャンピオンの朝食』は、もともとは一冊の本であった。そのうち、上澄みをすくったものが『屠殺場』となり、後に残ったものが『チャンピオン』となったのだ」という発言を残している。

真に恐縮ながらこの比喻をちよつと拝借させていただき、僕の最近の作品の傾向を端的に表してみたい。

まず、基本と成る原液は、第二長編『夢遊という散策』である。これの上澄みをすくったものが第三長編『ゴーツヘッド・スープ *Goats Head Soup*』となり、底に沈殿していたものが本作品となった。

僕は、永遠に未完成の作品というか、未整理のままでほっぱり出した作品である『夢遊という散策』の脱稿後、やつきになってその上澄みをすくう作業に没頭し、半年を経て『ゴーツヘッド』を完成させた。そして、その直後の三ヶ月でもって、上澄みをすくった際に捨ててしまった、あるいは零れ落ちてしまったノイズをかき集めて本作をまとめあげた。というわけで本作はノイズだらけというか、なんともわけのわからない作品になってしまった。

しかし、どちらかと言えば『ゴーツヘッド』よりも本作の方が、より僕らしい小説作品になっていると思っている。

というようなことを書いているうち、小学校の頃に書いた、小説とも作文ともつかない変な掌編のことを思い出した。たしか『二十歳になった日』という物語であったように思う。ストーリーは、秋に二十歳になる大学生が、お好み焼き屋のアルバイトをしながらノンベンダリと過ごし、どうでもいいことをブツクサこぼしている、というだけのものがある。要するに、未来の自分の姿を空想して書いた文章だ。さて、僕は今まさにその『二十歳になった日』において描かれた日々を生きているわけだが、お好み焼き屋ではバイトをしていないし（そう言えば、お好み焼き自体もここ一年くらい食べていない気がする）、小学校の頃の僕が見たらがっかりするような不健康な芋学生に成り下がってしまった。申し訳ないことである。

ちなみに、『二十歳になった日』脱稿後、僕はよほどその題材が気に入ったと見えて、『二

十歳を過ぎた日』『二十歳を過ぎた日』という二つの続編を書いている。内容はたとえば一作目とほぼ同じ、お好み焼き屋でバイトしている大学生の愚痴話であり、そんなたいして面白くもなさそうなねたを飽きることなく何度も何度も繰り返し書いていたとは、わがことながら不可解な話で、当時の自分が何を考えて生きていたのかわからなくなってくる。(よほど面白みの無い小学生時代を送っていたのだろうか)

それにしても、二十歳になると言っても、とりわけ派手な変化があるでなし、僕は未だに堂々巡りの真っ只中である。次に何を書くかなど、何一つ決めていないが、またぞろ今までのように阿呆らしい小説を書くことだろう。

それが我が歩む道である。ああ、なんてこった。

(二〇〇七年十一月十一日 寮の部屋にて)